石川県埋蔵文化財情報

第 41 号

巻頭図版（酒井バンドウマエ遺跡　古府シマ遺跡）

平成30年度上半期の発掘調査から …… 所長　垣内光次郎 …（1）

発掘調査略報

洲衙中世墳墓（輪島市）……（2）

田岸遺跡（七尾市）……（3）

酒井バンドウマエ遺跡（羽咋市）……（4）

古府シマ遺跡（小松市）……（8）

平成30年度上半期の出土品整理作業 ……（10）

平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録 ……（13）

土師器皿（かわらけ）は語る

―平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会の成果から― …… 藤田邦雄 …（15）

古代歴史文化協議会共同調査研究事業「古墳時代の玉類」

…… 伊藤雅文・中屋克彦・林　大智・西田昌弘 …（29）

調査研究報告 ……（39）

古代能登の挽物について …… 久田正弘 …（39）

2019年７月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

酒井バンドウマエ遺跡

調査区遠景（北東から）

羽咋市北東部、碁石ヶ峰西麓の扇状地に立地する遺跡であり、写真手前中央から左側に集落が展開している。古代～中世の集落遺跡であり、掘立柱建物・竪穴建物・道路状遺構・溝・水田などを検出した。

６区掘立柱建物群

５・６区の掘立柱建物群は、建物の主軸方位から大きく３つのグループに分かれる。写真右下には、路面幅が約２～2.5ｍの道路状遺構が存在する。

調査区遠景（北東から）

6区掘立柱建物群

写真解説

古府シマ遺跡

遺跡上空から白山方向を望む（西北西から）

国府台地の南西端に鎮座する石部神社は古来、「府南社」とも称され「舟見社」とも記されてきた。遺跡はその西側の水田部に立地する。

調査区全景（上空から・画像上が北）

古代からの中世前半にかけての遺構・遺物を多数確認した。加賀国府の推定地にも近いことから、その関連施設である可能性があろう。

遺跡上空から白山方向を望む（西北西から）

調査区全景（上空から・画像上が北）

平成30年度上半期の発掘調査から

センター所長　垣内光次郎

平成30年度は、石川県教育委員会から10件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省6件と多く、鉄道・運輸機構1件、県土木部3件が少ない。本号においては、主に上半期に発掘調査を実施した能登の3遺跡と加賀の1遺跡の概要を紹介する。

洲衛中世墳墓（輪島市）は、能登空港に近い丘陵地を縦断する一般国道470号（輪島道路）建設に際して発掘調査を実施したものである。調査地は洲衛の集落背後に位置する里山で、近隣から珠洲焼の蔵骨器が出土したことから、尾根上の集石などは中世墳墓の遺構と推定されたが、それを裏付ける陶磁器等の出土はなく、自然石を墓標とした近世の洲衛集落の墓地に関連するものとみられる。

田岸遺跡（七尾市）は、七尾北湾に面した海岸段丘上に所在する縄文時代中期の集落遺跡で、調査は湾岸を走る一般国道249号の改築事業に因るものである。また、本遺跡の発掘は、1964（昭和39）年の中島町史編纂に係る調査に始まり、能登地方では縄文時代中期の集落遺跡として広く知られている。今回の調査区は、遺跡の南端部にあたり遺構の密度は希薄であったが、中期中葉の土器や石器の出土から新たな知見がえられると共に、明年度に残された北側調査区へ期待が高まった。

酒井バンドウマエ遺跡（羽咋市）は、邑知地溝帯に見受けられる小扇状地に営まれた集落遺跡で調査成果は過年度のそれと似ている。上層は中世、下層は古代、新たに確認した最下層は縄文時代晩期～弥生後期の文化層で、洪水堆積の砂礫層を挟んで広がっていた。なかでも7区で検出した8世紀中葉の竪穴建物は、床面とカマドの補修、フイゴ羽口の出土から、その機能は「住居→鍛冶工房→住居」とへ変化したことを確認した。

古府シマ遺跡（小松市）は、梯川の中流右岸に位置する集落遺跡で、その立地環境から加賀の国府や国衙に関連する遺跡と推定されてきた。今回、河岸段丘に設定した調査区のうち、約250㎡の3-1区からは、500基を超える柱穴に加えて、大型井戸も多く検出した。出土遺物は遺構・包含層とも多く、12世紀代の土師器やその後のカワラケを中心に、白磁・青磁などの輸入陶磁器、珠洲焼や越前焼の陶器製品などがみられた。遺物の出土量は梯川流域の古代～中世集落と比べても多く、加賀国府や国衙に関連する可能性がより高まった。

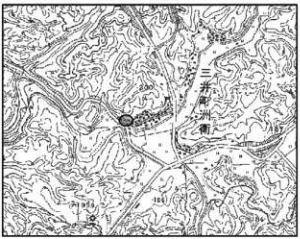
平成30年度発掘調査遺跡

No.	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	時代	関係機関	関係事業
1		庄（しょう）・西道遺跡、浄願寺（じょうがんじ）遺跡	加賀市庄町他	4,650	弥生～中世	国土交通省	一般国道8号改築（加賀庄編）
2		願法寺（がんぽうじ）ヤック遺跡、願法寺（がんぽうじ）ジンヤマ窯跡	金沢市願法寺町	4,720	古代～中世		一般国道159号改築（金沢東部環状道路）
3	○	酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市酒井町	4,390	縄文～中世		一般国道159号改築（羽咋道路）
4	○	洲衛中世墳墓（すえもりちゅうせいふんぼ）	輪島市三井町洲衛	1,300	近世		一般国道470号改築（輪島道路）
5		一針（ひとはり）C遺跡	小松市一針町	2,200	弥生～中世		梯川改修
6	○	古府（こふ）シマ遺跡	小松市古府町	2,000	古代～中世		
7		弓波（ゆみなみ）遺跡	加賀市弓波町	440	弥生～近世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設
8		吉岩（よいわ）遺跡	白山市白山町	1,350	古代～中世	土木部	地方改修一般県道　手取川白帆車道線
9		柳田（やなぎだ）ヲ（を）A遺跡	羽咋市柳田町	430	弥生～中世		地方道改築主要地方道金沢田鶴浜線（のと里山海道）
10	○	田岸（たぎし）遺跡	七尾市中島町田岸	600	縄文		一般国道249号　国道改築（防災・安全）事業
	4件	10件		22,080			

洲衛中世墳墓

所 在 地　輪島市三井町洲衛地内
調査面積　1,300㎡

調査期間　平成30年５月９日～同年７月９日
調査担当　澤辺利明　増永祐介



遺跡位置図（S=25,000）

調査区遠景（北西から）

尾根部発掘作業風景（南西から）

遺跡は、洲衛地区住民の墓地移転の際に、蔵骨器とみられる珠洲焼が出土したことにより知られた。今回の発掘調査は一般国道470号（輪島道路）建設にともなうもので、珠洲焼出土地に接した比高約10ｍの尾根及びその西側の谷が調査対象となった。尾根部には、西側の谷部に面して近隣７戸の墓地がおかれ、うち２戸の墓地（各３ｍ四方程の範囲）が調査区内に位置した。この墓地の存在や、斜面に風化した角礫が露出していたことなどから調査前には、この尾根部に中世墳墓等の存在が推定された。

調査の結果、墓地の構築材と思われた角礫は、表土下10～20cmで安山岩の岩盤となり、これが板あるいは角礫状に破砕したものが地表に露出していたことが判明した。また、２戸の墓地のうち一つは基壇をともなう墓で、地山面まで改変が加えられていた。もう一つは木箱等を蔵骨器とし、地上に自然石を墓標として置く集落旧来の埋葬形式を残しており、調査時には改葬され、墓石20数個が集積された状態であった。墓石を取り除き掘り下げたが、改葬時に取りこぼされた人骨を確認したほかは顕著な遺構は認められず、遺物も出土しなかった。ほか斜面中腹で溝状の凹み（長さ約2.5ｍ、幅約１ｍ、深さ50cm）を検出したが、時期・性格は不明であった。

遺物は、少量の近世陶磁器のほか、須恵器壺小片が一点出土した。調査地南方約400ｍには平安時代前期の須恵器窯、洲衛窯跡西支群が所在しており、関連がうかがわれるものである。

谷部については、密な植林により事前に遺跡の有無を確認ができなかった箇所を、今回トレンチにより確認調査を行った。その結果、数点の陶磁器が出土したが、ほか遺構・遺物は確認されなかった。　（澤辺　利明）

田岸（たぎし）遺跡

所 在 地　七尾市中島町田岸地内
調査面積　600㎡

調査期間　平成30年８月１日～同年９月26日
調査担当　島田亮仁　増永佑介

遺跡位置図（S=1/25,000）

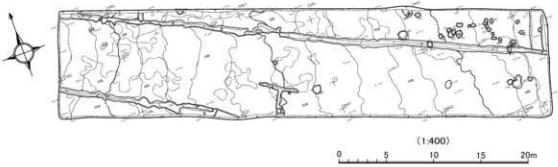
遺跡は、のと鉄道西岸駅から北へ約1.5㎞の七尾湾を望む海岸段丘上に立地する。現況は畑地であり、標高約16～20ｍを測る。発掘調査は一般国道249号改築事業に先立つもので、面積は600㎡である。

調査区は山側から海側に向かって緩やかに傾斜しており、比高差は約2.8ｍである。重機で表土除去を行ったが、包含層は残っておらず、調査区の大部分が基盤層を形成する岩盤であった。

それは後世の削平（畑地の造成など）によると思われ、調査区東側で褐色粘土の基盤層上に、わずかに遺構を確認した。

調査の結果、調査区の海側に縄文時代の土坑、小穴を確認した。遺構の覆土は明褐色粘質土を基調とし、炭化物や焼土が混じる。土坑からは、縄文時代中期中葉の土器が出土したが出土量は少ない。調査区から縄文土器、石器、須恵器、陶磁器、土錘が少量出土した。石器の中には、能登産の玉髄質泥岩（通称横山石）や信州産と推定される黒曜石の細片が出土している。

（島田　亮仁）



完掘状況（南から）

縄文土器出土状況（南西から）

酒井（さかい）バンドウマエ遺跡

所 在 地　羽咋市酒井町地内
調査面積　4,390㎡

調査期間　平成30年５月７日～31年１月29日
調査担当　北川晴夫　澤辺利明　中谷光里
　　神谷英生　増永祐介

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

・最下層では、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土坑墓や弥生時代後期の川跡を検出した。
・下層では、古代の集落を確認し、掘立柱建物、竪穴建物、溝、川跡などを検出した。
・上層では、中世の集落を確認し、掘立柱建物溝、水田などを検出した。

遺跡は、羽咋市北東部、碁石ヶ峰西麓の扇状地の先端に位置する。調査地の東側には永光寺川が流れ、西側は邑知潟にかけて水田地帯が広がっている。調査は一般国道159号改築（羽咋道路）に伴うもので、昨年度に引き続き実施した。今年度は５区下層から８区までの調査を行い、昨年度検出した中世、古代の遺構の他に、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の遺構も検出した。各時代の遺構検出面をそれぞれ上層、下層、最下層と称した。

７区東側の最下層で、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土坑墓と弥生時代後期の川跡を検出した。土坑墓は、やや変形した楕円形を呈し、長径約1.5ｍ、短径約1.4ｍ、深さ５～10cmを測る。土坑墓からは土器棺とみられる深鉢の破片がまとまって出土し、再葬が行われたと推測される。また川跡では、弥生後期の完形壺や土圧で押し潰された甕が隣接して出土し、廃棄されたものと考えられる。

下層では、古代の集落を確認し、掘立柱建物８棟、竪穴建物１棟、溝、土坑などや、川跡や洪水の跡も検出した。特に６区では、遺構検出の際に、洪水によるアメーバ状の流路堆積を検出した。また、掘立柱建物の柱根の複数が西側に傾いていたことから、東側に位置する碁石ケ峰山地から洪水土砂が流入したことが推測できる。

掘立柱建物は５区で２棟、６区で６棟、計８棟検出した。これらのうち、６棟で長軸方位が確認でき、概ね、東－西方向３棟（SB203３間×４間、SB301、SB302）、北西－南東方向２棟（SB303、SB304）、北東－南西方向１棟（SB202）の３グループに分類することができる。柱穴からは、時期を特定する遺物は出土しなかった。P389から７世紀後半～８世紀前半頃の土師器甕が出土しており、これは埋納ピットと思われ、近接するSB304に伴う可能性があろう。

平成27年度調査2区では、道路の側溝と思われる２条の溝を検出した。この２条の溝は北側に延び、6区中央南端で概ね直角に東側に曲がり、南側に隣接する幅約２ｍのSD306と並行して調査区外の東側へ延びていた。２条の溝が道路の側溝であるならば、路面幅は約２～2.5ｍを測る。

７区南側で、外周溝が巡る８世紀中頃の鍛冶関連の竪穴建物を検出した。竪穴部は、一辺が約４ｍ×4.4ｍの方形を呈し、検出面からの掘り方の深さは概ね25～30cmを測る。この建物は床面の作り替えや補修を行い、東壁のほぼ同じ場所で、最初（建物構築時）はカマド、次が鍛冶炉、最後には再びカマドを設けていた。カマド周辺からは土師器甕の破片、竪穴部からは鞴の羽口が出土した。

外周溝は、形状が隅丸方形（約９ｍ×10ｍ）で、南西側でやや膨らんでいる。地形は東側から西側に、北東側から南西側に緩やかに傾斜し、南西側隅に水が流れるようになっており、排水溝も農道下へ延びていたと推測できる。この溝が約40～50㎝と深いのは湿気を嫌う鍛冶炉との関連で深く掘られたものであろう。外周溝の北東側から南東側にかけて、多くの須恵器や土師器、櫂が出土した。カマドや鍛冶炉の位置から、東側は建物の裏側にあたり、目立ちにくいところに土器などを廃棄したと推測できる。外周溝の上層から８世紀中頃の内黒土師器埦が出土し、また竪穴部の覆土の上方からも同時期の須恵器坏蓋が出土しており、外周溝と竪穴部が同時に機能を失ったと考えられる。

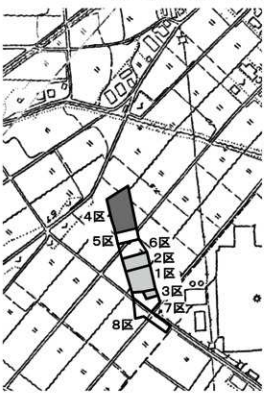
上層では、中世の集落を確認し、掘立柱建物、溝、畝溝、水田など検出した。７区で検出した掘立柱建物は、平成27年度調査２区で柱穴の一部が検出されており、規模が２間×３間、桁間約2.4ｍ、梁間約２ｍを測る側柱建物であることが判明した。この建物の柱穴には礎板を持つものもあった。７・８区で水田を検出したが形は不定形であった。７区では、南側から北側に向かって緩やかに傾斜しており、地形に沿って水田が形成されていたと考えられる。８区では、ほ場整備などにより著しく削平を受けていた。

今年度調査では、７区で縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土坑墓と、弥生時代後期の川跡を検出したことから、これらの時期に人々が調査区周辺で活動していたことが新たに判明した。また、各層の遺構面には、川跡や土石流の痕跡が多く確認されており、人々の生活と自然の驚異が隣り合わせであったことが伺えた。

酒井バンドウマエ遺跡では、古代の掘立柱建物や竪穴建物などは１～７区で、中世の掘立柱建物などは１・２・４・５区で検出され、８区では調査区の大部分が川跡であった。道路の側溝と思われる２条の溝が１・２・６区で確認され、この溝は６区では調査区外の東側に延びていた。よって、古代～中世の集落は調査区外の東側（山側の扇状地）に中心があったと推測されよう。

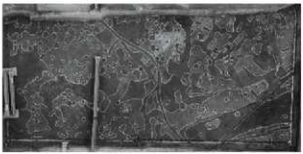
（北川　晴夫・久田　正弘）

調査区全景（南西から）

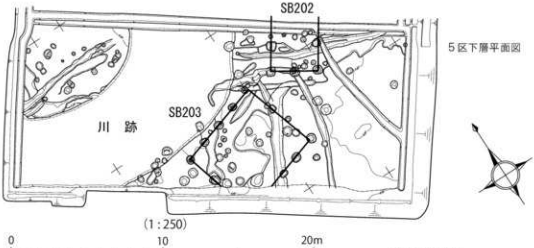


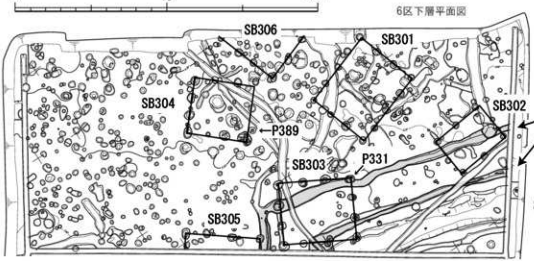
調査区の配置

掘立柱建物SB203(西から)



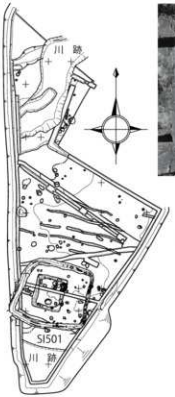
洪水によるアメーバ状流路堆積(遺構検出時　真上から)





P389甕出土状況(南東から)

SB303　P331　西側に傾く柱根(南から)



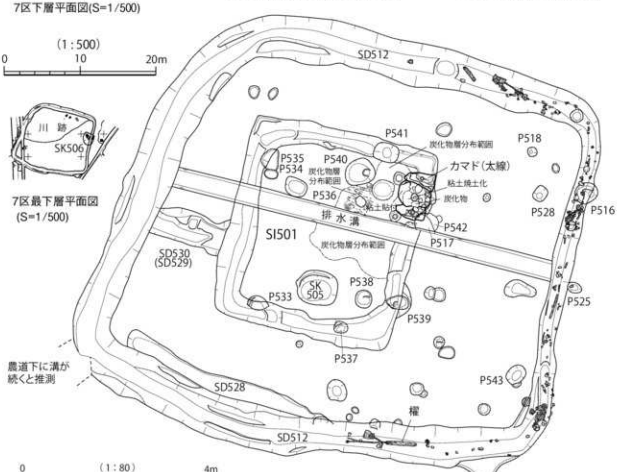
7区下層平面図(S=1/500)

竪穴建物(真上から)

SK506土器出土状況(西から)

カマド検出状況(建物構築時 西から)

SD512 遺物出土状況(南から)



竪穴建物平面図(S=1/80)

古府（こふ）シマ遺跡

所在地　小松市古府町地内
調査面積　2,000㎡

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査期間　平成30年５月８日～10月31日
調査担当　浜崎悟司、西山美那

調査成果の要点
・加賀国府推定地周辺において古代～中世前半の遺構・遺物を多数検出した。

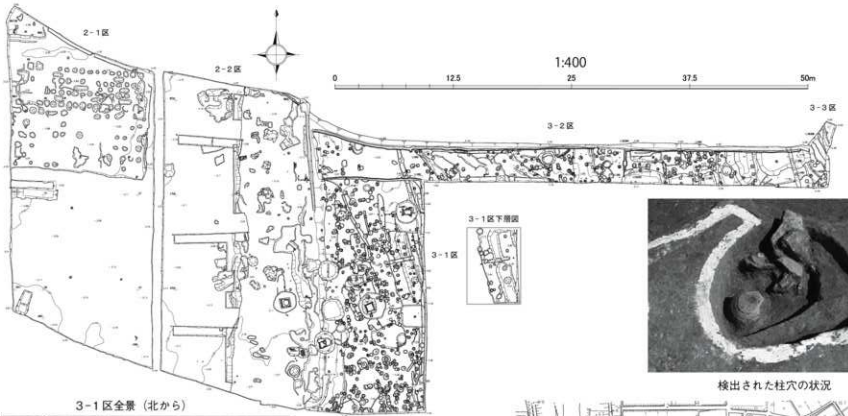
梯川を河口から遡るとき最初に目にする高台（国府台地）の裾部、水田域に展開する遺跡である。遺跡に東接する台地の南西端（通称舟見丘、標高13m）には石部神社が鎮座し、同社が古来「府南（ふなみ）社」とも呼ばれてきたことから、社の北方に古代加賀国府があったと推定されてきた。本遺跡北方に続く水田の小字は「タチ」であり、国府比定の傍証の一つとする意見もある。

遺跡は昭和57年度県営ほ場整備事業に先立った分布調査により、範囲がほぼ確定しており、今回梯川の築堤工事にかかり初めて発掘調査を実施した。地形が降る西側（下流側）から東側（上流側）へ向けて、現状の田筆により調査区を１・２・３区とした。２区東側は工事による削平を被り、３区は盛土保存された地区である。ほ場整備前の旧田面でみると３区東端で5.44ｍ、２区中程で4.23ｍ、１区で3.29ｍとなっている。西方へ向けて降る地形を水田化したものであろう。

調査の結果、３区において平安時代末頃を中心とする前後400年程度の時期幅に収まる遺構・遺物を検出した。２－２区中程以西は中世後半期以降に埋没した河川であり，古代の遺構は認められない。２－２区東半では河川による削平は及んでいないが、古代の遺構としては柱穴が認められず、井戸が散在する程度なので、ほ場整備による著しい削平を受けていたものと考えられる。３－１区の北端付近では包含層が最も厚くなり（最大80cm）、３－２区中程にかけての範囲で遺構面が２面確認された。

３－１区（約250㎡）からは柱穴が500基余り検出された。柱穴は柱がほぼ全てが抜き取られた状況であった。出土品は未洗浄だが、現地調査中の印象では糸切の土師器埦・皿類が膨大な量（50箱近く）出土し、青磁・白磁などの輸入陶磁器類の出土も多かった。井戸は土圧による井戸側の歪みが著しかったが、強固かつ精緻な造作を窺わせるものであった。発掘調査地の基盤層は粘土と砂であったにもかかわらず、包含層や遺構には拳大～人頭大の礫が多く含まれていた。据え置かれた状況のものは認められなかったが、大小・切石非切石を問わずそれらの半数近くが被熱していた。

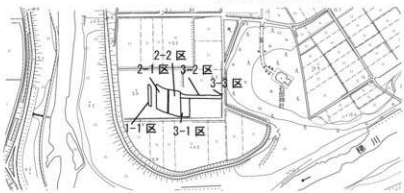
こうした所見は今後の調査の留意点ともなるが、従来専ら歴史地理的に指摘されてきた国府推定地周辺において、初めて同時期の遺構・遺物がまとまって確認されたことが重要である。今回の調査結果からこれまで考古学的には殆んど不明であった加賀国府について考古学から検討する成果が含まれているのではなかろうか。今後の調査・整理が注目される遺跡である。　（浜崎　悟司）



3-1区全景（北から）

検出された柱穴の状況

大型井戸



調査区配置図（1/5,000）

平成30年度上半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

上半期は塔尾遺跡（加賀市 平成29年度調査）、八日市地方遺跡（小松市 平成27～29年度調査）の整理作業を行った。

塔尾遺跡は、縄文時代と中世を主とする遺跡であり、記名・分類・接合と土器・石製品・木製品・金属器の実測・トレースを行った。縄文土器をはじめ、越前焼、珠洲焼、瀬戸等の土器類の器種もバラエティーに富んでおり、鉄滓、砥石、擂粉木等の木製品もあった。

八日市地方遺跡の今年度の整理は、木製品の実測・トレースと土器の記名・分類・接合であるが、上半期は木製品の実測を行った。実測した木製品は弥生時代中期のもので、保存状態も良好で加工痕も明瞭であった。器種も農具（鍬、鋤、泥除け、掘棒、木包丁、田下駄等）、工具（斧柄、楔、舞錐弓等）、紡織具（紡錘車、布送具、経送具等）、容器類（ジョッキ型、鉢、蓋、合子等）、祭祀具（剣形、舟形、鳥形等）、武器（弓、矢柄、鏃）、運搬具（背負子、田舟、櫂等）等と多種多様であった。未成品も多く、鍬や泥除けはいろいろな段階のものがあり、製作行程を詳細に復元できる資料である。また、加工痕が明瞭であったために、単位や加工の流れ、鉄器による加工痕の観察が難しく、あらためて木製品の実測の難しさを感じた。

（横山　そのみ）

擂粉木の実測作業（塔尾遺跡）

背負子の実測作業（八日市地方遺跡）

田舟の実測作業（八日市地方遺跡）

杭の実測作業（八日市地方遺跡）

県関係調査グループ

上半期は、島遺跡（小松市　平成29年度調査）、大菅波コショウズワリ遺跡（加賀市　平成28・29年度調査）、大領遺跡（小松市　平成29年度調査）、中ノ江遺跡（能美市、小松市　平成28年度調査）、梶井衛生センター遺跡（加賀市　平成28年度調査）の出土品整理作業を行った。

島遺跡は、国関係調査グループ・特定事業調査グループと合同で整理作業をした。

大菅波コショウズワリ遺跡は、記名・分類・接合作業を行った。土器は土師器、須恵器、陶磁器が多く、石製品は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、行火等があった。

大領遺跡は、記名・分類・接合と分類・接合、実測・トレース作業を行った。箱数は6箱と少なかったが、出土品は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、金属器、木製品等があり、内容は多彩であった。

中ノ江遺跡は、前年度の整理作業に引き続いて記名・分類・接合を行った。土器は全体的に破片が細かく、ネーミングや接合作業に時間をとられた。遺物の中には小型の縄文土器がひときわ目を引いたが、実は東北系の弥生土器（天王山式）であった。

梶井衛生センター遺跡は、記名・分類・接合、鉄滓２点の実測・トレースを行った。川跡から大型壺が複数個体出土しており、その破片はどれもが似通った色調、形をしていたため区別して接合するのが非常に難しかった。

（澤山　彬）

記名・分類・接合作業（大菅波コショウズワリ遺跡）

縄文土器の実測作業（大領遺跡）

東北系の弥生土器：天王山式の甕（中ノ江遺跡）

壺の接合作業（梶井衛生センター遺跡）

特定事業調査グループ

上半期は、島遺跡（小松市　平成29年度調査）、弓波遺跡（加賀市　平成28年度調査）、松梨遺跡（小松市　平成28・29年度調査）の整理作業を行った。

島遺跡は、記名・分類・接合、実測・トレースを行った。記名・分類・接合、実測作業は国関係調査グループ、県関係調査グループと合同で行った。土師器、須恵器、瓦や鉄滓、石鉢なども出土していた。

弓波遺跡では昨年に引き続き記名・分類・接合作業を行った。形が組み上がる土器が多く、接合作業は時間がかかった。特に大型土器が３点（須恵器１点、土師器２点）あり、須恵器大甕の接合作業は破片が細かかったので、形を組み上げるのが大変であった。土師器の壺は、1つは表面の調整もしっかり残ったものだったが、もう１つは表面と破断面の摩耗が著しく接合するのが難しかった。

松梨遺跡では、記名・分類・接合作業を行った。須恵器の坏や盤、中世の土師皿が多かった。須恵器の墨書土器が多く出土し、人名や「鬼食」などが確認され、土師器甕の人面墨書の破片も数点見つかった。接合作業は下半期に続く。　（土生　久美子）

記名・分類・接合（塔尾遺跡）

須恵器大甕の接合作業（弓波遺跡）

土師器壺の接合作業（弓波遺跡）

墨書土器（松梨遺跡）

平成30年度　環日本海文化交流史調査研究集会の記録

公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが主催する環日本海文化交流史調査研究集会は、平成12年度から継続して日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、各地域の研究者と調査・研究を行い、交流を図ってきたもので、平成30年度は第19回目の開催となった。

今年度のテーマは、昨年度の「近世成立期の土器・陶磁器様相―カワラケを中心に―」に続くものであり、今回は県内外の考古学研究者や大学生等が参加しやすいよう、土曜日に開催し、会場を市内中心部にある石川県立歴史博物館とした。その結果、市町の埋蔵文化財担当者等の参加も例年より多く、約80人の参加を得て盛況な調査研究集会となった。

当日配布した資料集は170頁に及ぶもので、北陸の講師の内容は昨年度の資料がより深化したものとなり、新たに京都と江戸の資料が加わり、胎土分析の成果も掲載した。特に附図として①土師器皿②瀬戸・美濃、貿易陶磁他③肥前、越中瀬戸④焼締陶器の4種類に分けた編年案を提示した。なお、この資料集は当センターホームページに掲載しているので、参照されたい。また、当日の討論において時間の制約から言及できなかった検討課題については、本誌P15～28を参照願いたい。

当日は会場後方に各地域から持ち寄った土師器皿を展示し、資料集に掲載された土器を観察する機会を設けた。これだけの地域の土師器皿を一同に見る機会は滅多にないので、多くの参加者が各地域の特徴などを見比べていた。講師の皆様には遠路にも拘わらず貴重な遺物をお持ちいただきまして感謝いたします。

（立原　秀明）

当日資料集目次

『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相－城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に－』

京　都　森島康雄「京都」京都府立丹後郷土資料館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

福井①　阿部　来「越前における15世紀後半～16世紀中葉の土器・陶磁器」勝山市教育委員会・15

福井②　中原義史「福井城跡の土師器皿―16世紀末～17世紀―」福井県教育庁埋蔵文化財調査センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

富　山　堀内大介「越中における近世成立期の土師器皿の諸様相―富山城跡出土資料から―」富山市埋蔵文化財センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

石川①　岩瀬由美「加賀・能登における15世紀後半～17世紀の土器・陶磁器様相」公益財団法人石川県埋蔵文化財センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

石川②　滝川重徳「金沢城跡・金沢城下の遺跡における土師器皿と陶磁器の様相―16世紀後半～17世紀後半」石川県金沢城調査研究所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103

江　戸　水本和美「江戸の陶磁器・土器の様相」東京藝術大学大学院・・・・・・・・・・・・127

胎土分析　長佐古真也、西本右子・丸山毅真「近世初期土師器皿の生産地推定（速報）～非破壊元素分析のポテンシャル～」公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター、神奈川大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163

附図1　土師器皿編年案　　附図2　瀬戸・美濃、貿易陶磁他編年案

附図3　肥前、越中瀬戸編年案　　附図4　焼締陶器他編年案

講師１

講師２

会場の様子

各地域の土師器皿

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載（石川県埋蔵文化財情報）
第１回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第２回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第８号
第３回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第４回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える	第11号
第５回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第６回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心に－	第15号
第７回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－	第17号
第８回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－	第19号
第９回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塩－その系譜と伝播を探る－	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前磁器から探る－	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26.10.24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相－カワラケを中心に－	第39号
第19回	H31.2.23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相－城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に－	本号（第41号）

土師器皿（かわらけ）は語る

―平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会の成果から―

藤田邦雄

1．はじめに

今回の研究集会のテーマは「北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相―城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に―」である。北陸において恒常的に出土が認められる土師器皿の編年観については、今までは資料的な制約もあり中世と近世それぞれの側で語られることが多く、そのためどうしても中世末から近世にかけての様相が不鮮明であった。平成22年（2010）の同研究集会では、肥前陶磁からみた16世紀末以降の流通をテーマに近世の画期を探った[1]が、今回は近年の福井、金沢、富山各城下等からの資料の蓄積を受け、土師器皿の分類と編年を軸とした上記テーマを設定した。

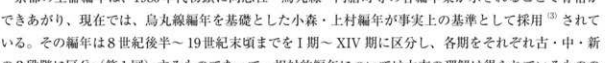
対象時期については、北陸の共通項として京都系土師器皿の消長が追える15世紀後半～17世紀代とし、地域的には福井（越前）、石川（加賀・能登）、富山（越中）の北陸3県に、平安時代末以降北陸をはじめとした列島各地に少なからぬ影響を与え続けている京都と逆にロクロ土師器のイメージが強く北陸との関わりが顕著ではない東国江戸を加え比較対照とした。また、土師器皿と共伴する各種陶磁器類（主に瀬戸・美濃、貿易陶磁、肥前陶磁、越中瀬戸、越前・珠洲等の焼締陶器）についても取り上げ、統一政権誕生前後における土器・陶磁器組成の変遷及び地域性等から導き出される時代の画期を追った。さらに、非破壊での機器分析による土師器皿の生産地推定も試みられ、非常に興味深い可能性が示されている。

ここでは、今回の研究集会で報告された最新の研究成果を振り返りながら、当日の“討論”の場で言及できなかったいくつかの検討課題について若干の整理をしてみたい。

2．京都の様相

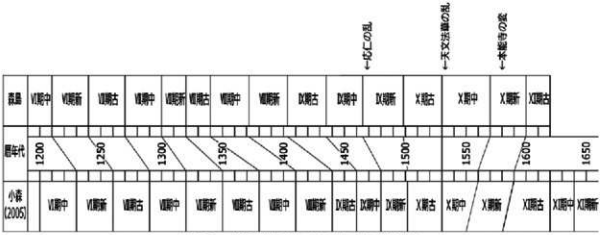
今回の資料作りの中で、北陸における京都系土師器皿の動向を一つの共通軸とした以上、まず確認すべきは京都の様相である（P1～14［HP収録[2]の研究集会当日資料集引用頁：以下同じ］）。

京都の土器編年は、1980年代初頭に同志社・烏丸線・内膳町等の各編年案が示されることで骨格ができあがり、現在では、烏丸線編年を基礎とした小森・上村編年が事実上の基準として採用[3]されている。その編年は8世紀後半～19世紀末頃までをⅠ期～XIV期に区分し、各期をそれぞれ古・中・新の3段階に区分（第1図）するものであって、相対的編年については大方の理解は得られているものの、暦年代については根拠となる資料に乏しいこともあり、共通認識ができていない現状にある（P1）。



第1図　京都基準編年（小森・上村編年）

森島はこのようにして、現在の京都基準編年への疑義を示し、天文法華の乱に伴う被災資料の暦年代観については、1530年頃との認識で一致するが、そこを境とした13～15世紀については、平安京跡で出土する瓦器椀・東播系須恵器鉢・大和産羽釜などと京都の土師器皿の年代観が合わないとして基準編年より引き上げ、16世紀後半については、織豊期城郭の瓦研究の成果などから全体に引き下げる年代観を提示（第2図）している。



第２図　京都基準編年と森島編年の年代観比較

では、森島の報文にそって土師器皿の変遷を具体的にみてみよう。編年図は大きく、皿Ｓ（白土器）と皿Ｎ（赤土器）にわかれる（第３図）が､我々が一般的に京都系としてイメージしているタイプは、その生産地が木野・幡枝などの洛北と推定されている皿Ｓ（Sh）の方である。

15世紀後半（Ⅸ期中～新）で皿Ｓは前期に比べ厚手となり、器形は口縁部が伸びて外反、低平化する方向に変化する。法量分化はさらに進むが、口径12.0 ～ 12.5㎝、器高2.5㎝程度のものが最も多い。口縁部内側のナデの下端には水で垂れた粘土が溜まり、わずかな凸線状に底部周縁をめぐる。小皿 Sh は大半がへそ皿で、底部を押し上げた際にできる爪の圧痕がへその中に認められる。

16世紀（Ⅹ期）には皿Ｓの大皿はさらに低平化が進み、口縁部が短くなって口径は縮小化する方向にある。16世紀中葉（Ⅹ期中）では底部が平らになり､内底面の圏線の凹線化が明確になるとともに、ナデの最後を逆方向にナデ抜くもの（「2」字状ナデ）が目立つようになる。口縁端部は内傾する端面をもつようになり、16世紀後半（Ⅹ期新）ではやや肥厚して尖り気味に納めるものが多く、16世紀末には短く直線的になる。へそ皿は低平化が進み器高1.5㎝程度となり、Ⅹ期中にはほとんどみられなくなる。代わって口縁部にナデ調整がみられない皿 Nr が現れる。

17世紀前半～中葉（XI 期）には皿Ｓの大皿底部は再び丸みを帯びるようになり､口縁部は短くなって低平化が進む。内底面周縁の凹線状の圏線は明瞭で、17世紀中葉（XI 期新）にはヘラ状工具で装飾的に施したものが現れる。

さて、こうした15世紀後半～ 17世紀の皿Ｓ及び皿 Sh の変遷をいくつかの要素に着目してたどると、

① 器　形：順次低平化が進行

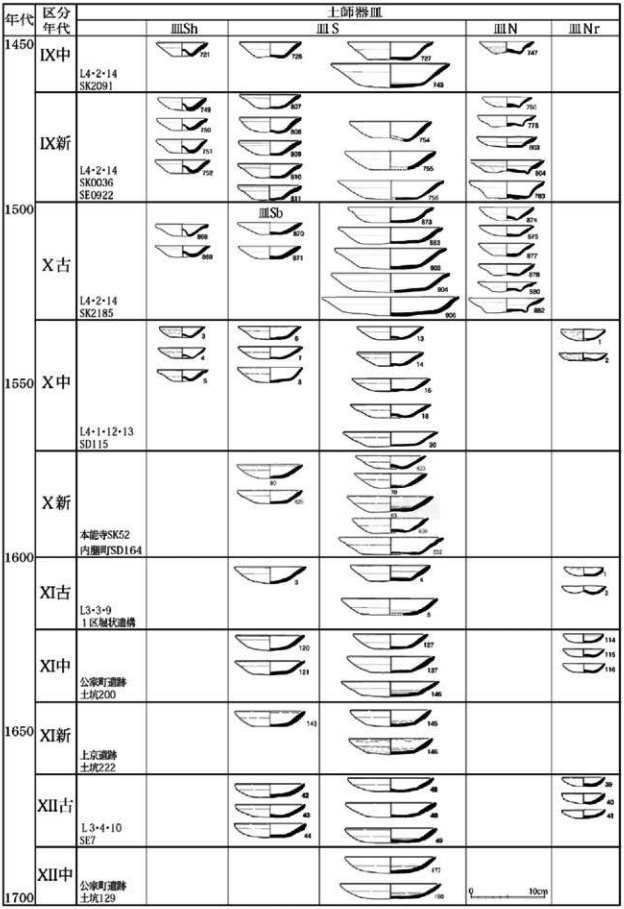
② 口縁部：伸びて外反→短く口径は縮小化→端部内傾化→肥厚して尖り気味→短く直線的

③ 底周縁：わずかな凸線状→やや凹んだ圏線→凹線状に明確化→圏線明瞭→ヘラ圏線

④ ナ　デ：圏線の凹線化とともに、進行逆方向へのナデ抜き（「2」字状ナデ）目立つ

⑤ 皿　Sh：大半へそ皿→へそ皿低平化、消失→皿 Nr 出現

といった流れがみてとれる。おそらくこのような京都産土師器皿の構成要素が様々な過程で複雑に入り交じり、各地の京都系土師器皿を形作っているものと思われるが、その背景を読み解くことは難しい。そのためここでは、主に現象面からみた各地の状況についてみていくこととなる。なお、該期における森島編年の画期は、1500年頃（Ⅸ / Ⅹ期）、1600年頃（Ⅹ /XI 期）、1660頃（XI/XII 期）に設定されている。



第３図　京都土師器皿編年案（森島編年）

3．京都系土師器皿の消長

（1）出現

何をもって「京都系」とするか。中世後半期における京都系土師器皿の概念形態は、模倣の対象となった京都の皿Sに近いものと考えるが、岩瀬の分類（第4図・P78）によれば、

＊体部は緩やかに開き、口縁端部をつまみ上げる。

＊または端部内面にヨコナデによる面を形成し、外面は口縁部付近のみをヨコナデする。

＊内底面に凸圏線や凹線が観察される個体がある。

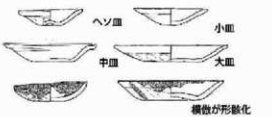
＊内面調整は小型品に「の」字状ナデ、中型品以上に「2」字状ナデを施すものがある。

＊小、中、大、特大の法量がみられる。

＊小皿にはへそ皿を含む。

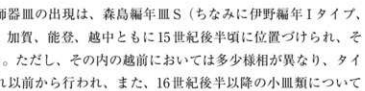
＊模倣が形骸化したものがみられる。

とあり、ここにほぼ大方の京都系土師器皿の要素が集約されているように思われる。



第4図　土師器皿器形分類（B類　京都系）

さて、おおよそ15世紀後半以降とされる北陸での京都系土師器皿の定量出土について、今回の報告では大きな変更点はなかったように思われるが[4]、阿部は京都の伊野編年Gタイプ[5]・中井編年皿H[6]との対比の中で、「深手で丸みを帯びた底部から開き気味に緩やかに立ち上がり、口縁部が外反する」B1類を設定（第5図・P15）し、京都産土師器皿の模倣として15世紀初頭頃からの出現を予想[7]している。また、今回在地系のA3類に含めてはいるものの「口縁部の横ナデが不明瞭」な小皿類（第6図・P23）及び中原がヒジ成形の可能性を指摘し「手づくねでナデ調整無し。小型品のみで、不整形のものが多い」とするD類（第7図・P33）については、出現時期が16世紀後半以降とする年代観も含め森島編年の皿Nr（第8図）に近く、今後の検証が必要となろう。



第5図　B1類　　第6図　A3類　　第7図　D類　　第8図　皿Nr

北陸の中世後半期における京都系土師器皿の出現は、森島編年皿S（ちなみに伊野編年Iタイプ、中井編年皿K）の模倣を軸として越前、加賀、能登、越中ともに15世紀後半頃に位置づけられ、その後独自の変化を遂げていくことになる。ただし、その内の越前においては多少様相が異なり、タイプの異なる京都産土師器皿の模倣がそれ以前から行われ、また、16世紀後半以降の小皿類についても別系譜の京都模倣を試みていた可能性がある。

（2）変遷と衰退

では、そうした京都系土師器皿は各地でどのような変遷をたどるのであろうか。

越前では16世紀前葉で在地系の衰退と京都系への集約化が進み、大型品（阿部B2類）は、凹圏線の明確化や器壁の厚手化のほか、口縁端部の鋭いつまみ上げが徐々に鈍化し方頭状になるといった型式変化[8]をたどる。その集約化の流れは福井城Ⅰ期（1575年（北庄城築城）～17世紀前葉）まで受け継がれる（第9図中原B類）が、一乗谷朝倉氏遺跡では一般的な「2」字状ナデが福井城跡ではみられない等の差異も観察（P29）されている。続く福井城Ⅱ期（17世紀中葉～1669年（寛文9年大火））・Ⅲ期（1669年～18世紀前葉）では再び在地系の土師器皿（R・G・H・K類）が加わるものの量的には少ない。結局16世紀からの系譜を引く京都系B類が福井城跡の中で出土量を減らしていくのは18世紀後半以降とされ、器形別ではBa1類、Bb1類（Ⅰ期）からBa2・3類、Bb2類（Ⅲ期）への量的推移が認められる。

B類	Ba類		見込みと立ち上がりの境がBb類に比べて不明瞭。 内面に回しナデを行う。		16世紀後葉～
		1	見込み中心付近から回しナデを行う。	32187-4	(枠ち手付きのものは17世紀中葉～)
		2	見込みの途中から回しナデを行う。	32187-8 42133-41	
		3	立ち上がりのみに回しナデを行う。	32127-6	
	Bb類		見込みと立ち上がりの境がBa類に比べて明瞭。 見込み端から回しナデを行う。		16世紀後葉～
		1	境が明瞭で、圏線状になる。	32187-2	
		2	境がやや不明瞭で圏線状の表現が弱いもの。	54109-6	
		3	立ち上がりが大きく外反し器高が低いもの。	36076-38	
D類			手づくねでナデ調整無し。 小型品のみで、不整形のものが多い。	32167-10	16世紀後葉～
G類			型成形	3134上-26	17世紀後葉～
H類			G系に形が似るが手づくねによるもの。	36141-6	17世紀後葉～
K類			立ち上がりを指で挟んで、同じ深さまで挟みナデを行う。	3134上-32	17世紀後葉～
R類			ロクロ成形	32127-12	17世紀中葉～

第９図　福井城跡土師器皿器形分類（中原分類）

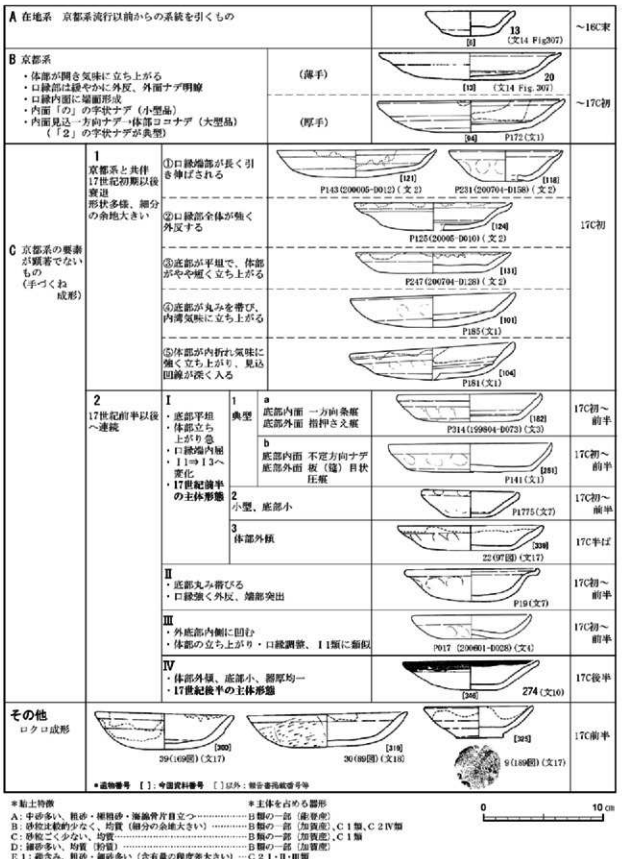
加賀、能登ともにA類(在地系)、B類(京都系)、C類(A・B類以外)として分類（第10図・P78）する。加賀では越前の動向と異なり、在地系A類はB類出現以降も特に衰退することなく17世紀前半にかけて共伴関係が認められる。B類の大皿タイプについては、口径が大きく薄手の深身で体部の開きが大きいことを特徴とし、時期が下がるにつれて口径が縮小し器壁がやや厚く浅い器形となり、体部の開きが弱くなる。調整をみると16世紀前半で内底面に凸圏線、17世紀前半で凹線が観察されるが、こうした京都系B類の系譜が辿えるのは17世紀前半までで、入れ替わるようにC類が増加する。

それに対して、能登の在地系A類は16世紀前葉頃までは京都系B類との共伴は辿えるが、それ以降の出土は非常に稀であり、越前に近い様相がみて取れる。B類小皿のへそ皿は15世紀後半から認められ、京都では16世紀中頃にはほぼみられなくなる(P6)が、能登では退化したものが16世紀末頃まで確認できる。B類大皿は、やはり新しくなるにしたがい口径の縮小、器高の減少、器壁の厚手化、模倣の形骸化等が指摘でき、凸圏線から凹線の顕在化という流れも辿える。16世紀末以降になると口縁部をつまんでナデる造作は残すものの体部の立ち上がりは強く、続く17世紀前葉では体部の開きは弱く厚手化が顕著となる。そして今のところ、能登でB類の系譜が辿えるのはここまでである。

A類 在地系	**手捏ね で、京都系土師器が入る以前から作られているものの系譜を引き、調整などに京都系土師器の影響がみられないもの。** ・丸底と平底に細分可能 ・平底タイプには体部がまっすぐ立ち上がるものと開くものがある。	
B類 京都系	**手捏ね で、京都の土師器の形態・調整を模倣したもの。** ・体部は緩やかに開き、口縁端部をつまみ上げる、または端部内面にヨコナデによる面を形成する。外面は口縁部付近のみをヨコナデする。 ・内面調整の痕跡、内底面に凸圏線や凹線が観察される個体がある。内面調整に小型品に「の」字状ナデ、中型品以上に「2」字状ナデを施すものがある。 ・小・中・大・特大の法量がみられる。小皿にはへソ皿を含む。 ・模倣が形骸化したものがみられる。	
C類	**在地系でも京都系でもなく系譜の追えないもの全て。** ・A類にもB類にも属さない手捏ね（B類に肥手を付けたものを含む）。 ・ロクロ土師器 ・外面にケズリ調整を施すもの	

第10図　加賀・能登土師器皿器形分類（岩瀬分類）

金沢城跡では今回新たに城下の資料を加え、16世紀後半～17世紀後半を対象としA類(在地系)、B類(京都系)、C類(京都系の要素が顕著でないもの)に大別(第11図・P109)した。B類の特徴については他地域との共通点も多いが、C類の概念は金沢城跡独自のもの(P103・104)であり、B類と部分的に共通の要素をもつ場合であっても、1610年前後の出現の時点で前代とのつながりが認めにくく、B類の終末前後にのみ認められる一群をC1類、後出的で17世紀前半以後に繋がる系統をC2類とする。C類はそれぞれにより細分され、時間的変遷との対応が試みられている。ちなみにやや複雑にはなるが土師器皿の４段階別変遷をたどると、①Ⅰ・Ⅱ段階(1580～1600年代)：B類主体。A類は少量で小型品に限定。②Ⅲ段階(1610年代)：C1類主体。B類は急速に減少。③Ⅳ～Ⅶ段階(1620～1650年頃)：C2Ⅰ類主体。細分するとⅣ(1620)C2Ⅰ1a類、Ⅴ(1630)C2Ⅰ1a・C2Ⅰ1b類、Ⅵ(1640) C2Ⅰ1b類、Ⅶ(1650) C2Ⅰ3類を主体とし、他のC2類は少数にとどまる。④Ⅷ段階(1660年代～)：C2Ⅳ類主体。17世紀後半の主体形態。となる。こうした時間軸の短い段階設定は、現時点ではいくつかの鍵層をもつ金沢城跡とその周辺域に限られるが、土師器皿の主体が京都系B類からC1類→C2類へと短期間のうちに移行する17世紀初頭(1610～20年代)は、城下の環境再編に関わる画期として注目される。

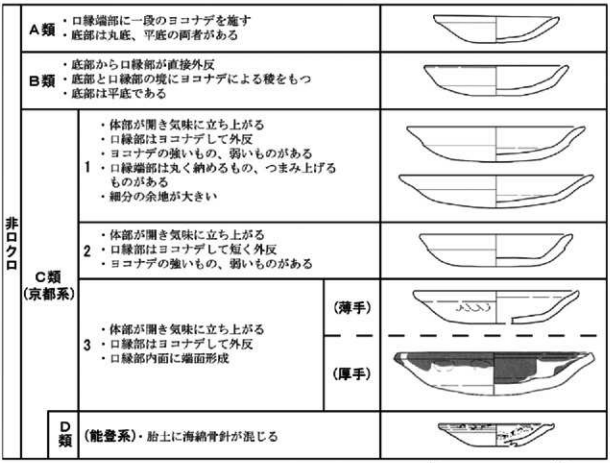


*胎土特徴
A：中砂多い、粗砂・雲母砂・海綿骨片目立つ……B類の一部（産地不明）
B：砂粒比較的少なく、均質（細分の余地大きい）……B類の一部（加賀産）、C 1類、C 2 IV類
C：砂粒ごく少ない、均質……B類の一部（加賀産）、C 1類
D：細砂多い、均質（粉質）……B類の一部（加賀産）
E 1：雲母多、粗砂・細砂多い（含有量の程度大きい）……C 2 I・II・III類
E 2：雲母～微、粗砂・細砂少ない……C 2 I・II・III類
（Bより石粒子大きく、開胎が粗い、E1より精良）

*土器を占める器形

第11図　金沢城跡・城下土師器皿器形分類（滝川分類）

富山城跡ではA・B類(在地系)、C・D類(京都系)として分類(第12図・P43)する。A類は17世紀中頃、B類は15世紀後半までの存続とするが、A類の中には口縁端部のヨコナデ輪やつまみ上げの状況等からみて京都系小・中皿類の混在もみられようか。京都系C類については16世紀になると口縁端部のつまみ上げが増え、後半には口縁部内面に端面をつくるC3類が出現し17世紀を通して確認できる。内底面の圏線については16世紀前半から中頃にかけてみられるが、その後は圏線をもたないものがほとんどとされる。また、17世紀中頃のC3類は金沢城跡で出土する箱型器形(滝川C2Ⅰ類か)に類似するとして金沢の影響を想定し、同様の影響(滝川C2Ⅳ類か)のもと17世紀後半の底部丸底化へつながるものとする。あと越中独自の様相として、17世紀中頃からの越中瀬戸素焼皿(ロクロ成形)の増加(P45)があげられ、18世紀前半以降の富山城下では従来からの土師器皿は大幅に減少し、その大半が越中瀬戸素焼皿で占められるようになる。



第12図　富山城跡土師器皿器形分類（堀内分類）

さて、北陸とはやや距離を置いた観のある「江戸」の15世紀後半～17世紀は、東国の一地域から幕藩体制における政治・軍事・経済の中心地として成長した過渡期(P127)にあたる。16世紀の京都系手づくねかわらけは、東京都葛飾区の葛西城址や八王子市の八王子城跡などでみられ、小田原北条氏などの地域勢力それぞれに固有のかわらけが存在しうる可能性が指摘されている。17世紀にはいり圧倒的多数を占めるロクロ成形の江戸在地系土器が成立していく中、東京大学本郷構内の“池遺構”で寛永６年(1629)を下限とする大量の手づくねかわらけが出土する。これらは加賀藩本郷邸での御成との関連から、京都系よりむしろ金沢とのつながりが考えられる(P132)が、こうした京都系土器の格の高い場における拠点的搬入とする様相は、江戸と北陸では大きな差異がみられるようである。

4．陶磁器様相

陶磁器との共伴関係をみていくうえで、森島は、①遺構の切り合いが著しい場合は必然的に古い遺構の遺物が混じる。②陶磁器類の大半は、生産地で想定される時期よりも新しい土師器皿と共伴するため混入遺物か使用時に共存していたものかの判別が難しい。③そのため、日常雑器の年代観が固まっていない地域において、陶磁器などの広域流通品のみから年代を決定することの孕む危険性を指摘(P10・13)する。また水本は、江戸における17世紀前半の陶磁器・土器の需要様相をグループ分けし、国産陶器や肥前磁器についても地域性や階層性等からみた生産・流通構造の複層的展開を予想(P134・135)するが、ここでは17世紀前後以降に新たな広域的出土が認められ、比較的器形・年代の推移が追いやすいと思われる肥前陶磁器の出現時期について各編年基準資料からみていきたい。

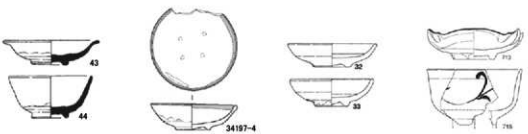
(1) 肥前陶器

京都：「平安京左京北辺三坊四町跡　堀45」　出土品は大半を土師器皿が占める。国産施釉陶器では肥前の灰釉碗・皿類(第13図)がみられ、瀬戸・美濃産の割合がやや多い。磁器類はすべて中国製で肥前は含まれていない。時期はXI期古(1600～)に属する。

越前：「福井城跡　土坑34197下層」　上層は撹乱により時期が多少混じりあう。土師器皿は京都系Ba1・Bb1類が出土。胎土目をもつ肥前灰釉皿(第14図)が共伴する。17世紀前葉(福井城Ⅰ期)に収まる資料とされる。

加賀：「小松城跡(第1次)　SK28」　平底で体部の器壁の厚い京都系土師器皿B類、目跡のみられない肥前灰釉皿(第15図)、瀬戸・美濃皿、見込に印花文をもつ大窯期の越中瀬戸皿などが共伴する。遺構の時期は、寛永17年(1640)に加賀藩三代藩主前田利常が隠居城とする以前の、前田氏が城代を置いていた時期(1600～)に該当する。

能登：「小島西遺跡　B区SD32」　京都系土師器皿B類は総じて器壁が厚手化しており口縁端部の造りは形骸化しているが、京都系の造りは意識されている。絵唐津の碗・皿(第16図)に見込に櫛描波状文のはいる大窯期の越中瀬戸折縁皿が共伴する。17世紀前葉の資料とする。



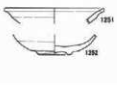
第13図　第14図　第15図　第16図

金沢：「金沢城跡　内堀橋北詰下層SX01」　土師器皿は京都系B類が主体を占め、その内の能登産の製品は1590年代と想定した前代の資料と比べると口縁端部の造り等で後出的とみられる。中国磁器青花皿、越中瀬戸大窯ソギ皿、肥前陶器鉄絵皿(第17図)等が共伴し、下限を1600年代と考える。

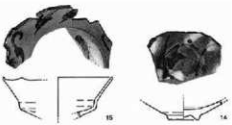
越中：「富山城跡　三ノ丸(レガートスクエア2区)堀2-SD481」　大型の堀で、慶長期の富山城外堀の開削(1605)に伴い埋め立てたと考える。土師器皿在地系A類、京都系C1・C3類、能登系D類が出土する。瀬戸・美濃、越中瀬戸等が共伴し、肥前では皿、壺、鉢等が報告されているがやや精査が必要か。ここでは鉄釉・灰釉皿(第18図)を取り上げた。遺構の下限は17世紀初頭とされる。

江戸：「東京駅八重洲北口遺跡　1264号遺構」　かわらけは江戸在地系成立以前で、ロクロの回転は左右双方がみられる。京都系の手づくねはない。景徳鎮磁器と瀬戸・美濃陶器を主体とする中で絵唐津皿類(第19図)等が登場する。八重洲1期の生活面との関連から1610年代頃を下限[9]とする。

第17図



第18図



第19図

肥前におけるやきもの生産は、1580年代頃、佐賀藩唐津市(旧北波多村)の岸嶽古窯跡群ではじまったとみられ、その後時をおかずに肥前一帯(佐賀藩・大村藩・平戸藩)に広がる。生産地編年のⅠ期(1580年～1610年代)の主な特徴としては、鉄絵装飾による「絵唐津」製品、皿の重ね焼きに「胎土目」使用、叩き成形による瓶・壺・甕等の内面青海波状の当て具痕等があげられる[10]。

今回第13～19図で抽出した出現期の肥前陶器は、おおむねこのⅠ期の製品に該当すると思われ、器種的には碗・皿類が大半を占める。また、出現時期についてはある程度の幅はあるものの、各地域とも確実に16世紀代に上がるものはみられず、ここでは17世紀前葉を下限とする17世紀初頭を想定しておきたい。

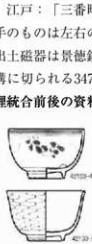
（2）肥前磁器

越前：「福井城跡　旧河川42133」　出土土師器皿は京都系Ba1・2類、Bb1・2類に分類できる。また、Ba2類に粘土で持ち手を付けた灯明受皿が出現する。陶磁器類は大量に出土し、肥前染付碗(第20図)の他、肥前陶器、瀬戸・美濃、越前等が含まれる。遺構は寛文9年(1669)の大火後に焼土を含む土砂で埋められており、該期を下限とする。

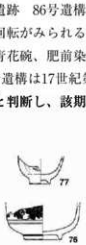
加賀：「大川遺跡　SX01」　外底部に板目状の圧痕が観察される土師器皿C類(滝川C2Ⅰ1b類に類似か)が出土し、越前、肥前染付碗・小坏(第21図)等が共伴する。加賀藩三代藩主前田利常が、小松城を隠居城とした寛永17年(1640)以降の小松城下町整備に伴う遺構群とされる。

金沢：「金沢城跡　石川門前土橋盛土３」　底部外面に板目状圧痕をもつ土師器皿C2Ⅰ1b類が主体となり、前代まで主体を占めたC2Ⅰ1a類はごく少数となる。また、小型品のC2Ⅰ2類も少量みられる。中国磁器青花、肥前磁器染付筒碗(第22図)、肥前陶器砂目皿、越中瀬戸向付等が共伴する。金沢城跡のⅥ段階(1640)にあたり、「広坂遺跡(１丁目)　ⅡSK2040(第23図)・SK2025」等も該当する。この段階から明確に肥前磁器が伴出するとともに、瀬戸・美濃が少なくなる。

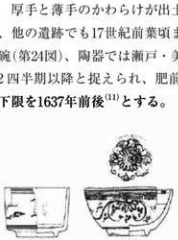
江戸：「三番町遺跡　86号遺構」　厚手と薄手のかわらけが出土する。厚手については左回転、薄手のものは左右の回転がみられるが、他の遺跡でも17世紀前葉頃まではこうした混在が認められる。出土磁器は景徳鎮青花碗、肥前染付碗(第24図)、陶器では瀬戸・美濃の白天目碗等が共伴する。本遺構に切られる347号遺構は17世紀第２四半期以降と捉えられ、肥前染付碗を寛永14年(1637)の窯場整**理統合前後の資料と判断し、該期の下限を1637年前後[11]とする。**



第20図



第21図



第22・23図

第24図

文禄・慶長の役(1592～1598)により九州各地の大名が朝鮮人陶工を多く日本に連れ帰った結果、朝鮮李朝の窯業技術が到来し、この中の磁器生産技術によって、肥前で国内はじめての磁器生産が1610年代頃に開始[12]される。肥前磁器の生産地編年は４期にわけられ、Ⅱ期の1610～1640年代は一般には「初期伊万里」と呼ばれ成形等に朝鮮の技術の名残が見受けられる。また、この中では伊万里・有田地方の窯場整理統合事件(寛永14年(1637))の前後で製品にいくつかの違いがあるため、Ⅱ－１期(1610～1630年代)とⅡ－２期(1630～1650年代)に区分[13]されている。

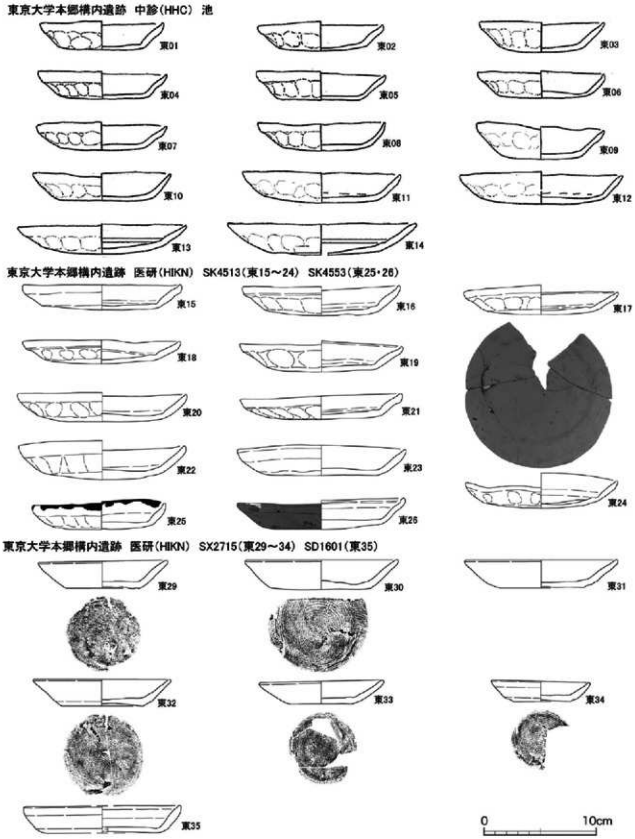
肥前磁器の出現期にあたっては、報告内容に沿って4地域からの資料を取り上げたが、越前(第20図)が中でも新しい。当該遺構出土の肥前磁器はⅡ期後半からⅢ期(1650～1690年代)前半のものが中心(P31)となり、遺構の年代も寛文９年(1669)の大火を下限とするため出土様相に大きな矛盾はないが、福井城跡ではこれらより古手のⅡ期製品も大量に出土しており、現時点においては今後の良好な一括資料が待たれるところである。その他の第21～24図については地域も離れた加賀・金沢と江戸からの事例であるが、おおよそⅡ期に収まる資料であり、その出現時期も1630年代後半～1640年前後と想定される。ただ、こうした食器様相には地域性・階層性等が反映され、共伴する中国磁器や肥前陶器、瀬戸・美濃等の動向とも強い関わりをもつため、組成全体の中での位置づけが重要となる。

５．土器胎土分析

今回の研究集会では各地域からの報告とともに、長佐古主導のもと、土師器皿の生産地推定に向けた非破壊胎土分析の有効性についても取り上げ(P163～172)ている。分析のきっかけとなったのは、東京大学本郷構内遺跡出土の手づくねかわらけと金沢城下出土の土師器皿との類似性[14]であり、加賀藩本郷邸における寛永６年(1629)の御成に伴う“池遺構”出土の手づくねかわらけが、国元金沢からの搬入品かどうかを科学分析で検証したのが今回の試みである。分析にあたっては、破壊分析が試料供与のネックとなる可能性が懸念されたため、考古資料としての形状が保たれる非破壊分析を選択した。ただし、分析精度が破壊分析より落ち、法量や形状等によっては資料（第27図・P165）や測定元素に制限が出るため、今後の土器胎土における非破壊分析の有効性を探る基礎情報の収集もあわせて行われた。

分析対象とした主な資料は、東京大学本郷構内遺跡35点(第25図・P164、手づくね27点・金箔１点・ロクロ成形７点)、金沢城跡15点(第26図・P165)、金沢城下町遺跡21点(第27図・P165)である[15]。第25図上・中段の東大の手づくねかわらけは、滝川分類C2Ⅰ1a類もしくはC2Ⅰ1b類に相当するとされ、東01～14は寛永６年の御成資料、SK4553(東25・26)では底部に「寛十四(1637)/丑九月廿日/申時/三度入」と刻書されたロクロかわらけが共伴することなど[16]から、1620～1630年代の資料群と想定される。また、比較対象とした第26・27図の金沢側の土師器皿についても、滝川分類C2Ⅰ1a類・C2Ⅰ1b類に比定され、推定帰属年代も東大と同様の1620～1630年代とされている。分析はエネルギー分散型元素分析装置(EDS)を用いた元素組成の定量分析で、７元素の定量を試みた。結果の詳細はここでは省くが、東大の手づくねかわらけは、二酸化珪素と酸化アルミニウム含有率及び酸化鉄と酸化チタン含有率の二元分布、測定７元素を用いたクラスター分析等においても、すべての値が金沢産領域にプロットされるなど、分析値からみる限り金沢産を疑う証拠はみあたらない(P169)。

御成という当時最上の武家儀礼の場で、江戸でも容易に入手可能なかわらけをあえて多くの手間と経費をかけて国元から大量(数万単位か)に運んだという事実は、当時の金沢産土師器皿のもつ特殊性と加賀前田家の地元産に対する自負心を考えるうえで興味深い。また、今回こうして非破壊での機器分析の有効性について一定の方向性が得られたことにより、今後より工夫・改良を加えていけば、非破壊による胎土分析の可能性はさらに広がっていくことが期待(P171)されよう。



第25図　東京大学本郷構内遺跡出土土師器皿

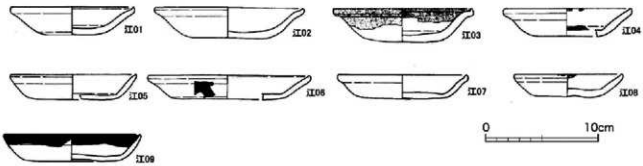
金沢城 五十間長屋台下層 VI面SD01 (1620年代)

／ 金01～04;C2Ⅰ1a類

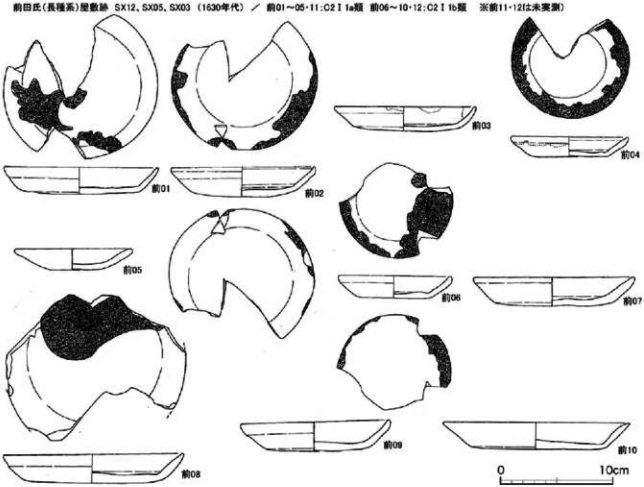
※ 金沢城本丸付段(2004-1地点)SK11 (1630年代) 全て未実測

／金05～10;C2Ⅰ1a類 金11～15;C2Ⅰ1b類

特別名勝 兼六園(江戸町推定地) 第3遺構面(1620年代) ／ Ⅱ01～Ⅱ04:Ⅱ類 Ⅱ05～Ⅱ09;C2Ⅰ1a類



前田氏(長種系)屋敷跡 SX12、SX05、SX03 (1630年代) ／ 前01～05・11;C2Ⅰ1a類 前06～10・12;C2Ⅰ1b類 ※前11・12は未実測



第26・27図 金沢城跡・金沢城下町遺跡出土土師器皿

6．おわりに

会場をはじめて県埋蔵文化財センターから県立歴史博物館に移して開催された平成最後の研究集会では、北陸三県の土師器皿(かわらけ)愛好者をはじめとして、県内外から多くの方々に参加いただき盛況のうちに幕を閉じることができた。事務局としても編年附図(A２版・４枚)のついた最新成果をまとめることができ、関係各位に感謝申し上げる次第であるが、当日“討論”の進行を担当した筆者としては、あまりにも時間が足りず、みなさんの貴重な疑問や関心が宙に浮いたまま終了してしまった想いに何とか行き場を求めたのが今回の拙文である。

当日の発表内容及び資料集の報告内容は多岐にわたり、土師器皿分類・編年基準資料・共伴陶磁器から導き出された編年案に基づき、各地における組成・系譜・画期等が検討されている。ここではその中から、京都産土師器皿の様相、各地京都系土師器皿の分類と変遷、肥前陶磁器の出現期、そして生産地推定に向けた土器胎土分析について取り上げ概観し、若干の解説を試みた。各変遷の画期において北陸の共通項をやや強善的に探るとすれば、土師器皿の様相では在地系から京都系への集約化が進む16世紀前半と、中世に系譜をもつ京都系が姿を消し次世代タイプに繋がる17世紀前半が一つの画期として想定されようか。また、17世紀前半については肥前陶磁器の出現・定着とも機を一にしており、両者の有機的な結びつきの有無に関しては今後の課題であるが、今回の研究集会のテーマにある“北陸にみる近世成立期”を考えるうえでは欠かすことのできない大画期として捉えておきたい。

なお、拙文内での引用等に際しては報告者の敬称を略させていただいた。また、その解釈等について誤解や齟齬があれば、すべて筆者の責任である。

【註・引用参考文献】

(1) (財)石川県埋蔵文化財センター　2010　『近世日本海域の陶磁器流通―肥前陶磁から探る―』平成22年度環日本海文化交流史調査研究集会発表要旨・資料集

(2)　WWW.ishikawa-maibun.jp（刊行物/資料⇒現説・講座等資料⇒平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会資料集）

(3)　小森俊寛・上村憲章　1996　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」『研究紀要 第３号』(財)京都市埋蔵文化財研究所

(4) 出現期の様相として森島からは、加賀の「勅使館跡D2-2土坑のB類大皿(P99)：京都大学白河北殿北辺の調査SD24出土資料(15世紀後半)に類似」は15世紀中葉、越中の「富山城跡三ノ丸レガートスクエア2-SD70のC1類大皿(P63)：青磁碗等共伴(～15世紀中頃)」は15世紀後半以降の印象を受けるとの指摘もあった。

(5)　伊野近富　1997　「１土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

(6)　中井淳史　2011　『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版

(7)・(8)　阿部　楽　2018　「越前における15～16世紀中葉の土器皿」『石川県埋蔵文化財情報 第39号』（公財)石川県埋蔵文化財センター

(9)・(11)　当日配付の水本追加編年案では、これらより古い一群も示されているが、ここでは当日資料集の基準案に拠った。

(10)・(12)　中野雄二　2010　「近世肥前窯業史―16世紀末～18世紀―」「近世日本海域の陶磁器流通―肥前陶磁から探る―」(財)石川県埋蔵文化財センター

(13)　大橋康二　2000　「Ⅰ　九州陶磁概論」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会

(14)　堀内秀樹　2000　「史料から見た御成と池遺構出土資料」「加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡」東京大学総合研究博物館

(15)　胎土分析資料の選定は、金沢城跡分は滝川重徳、金沢城下町遺跡分は岩瀬由美が行った。

(16)　東京大学埋蔵文化財調査室　2019　「東京大学本郷構内の遺跡　医学部教育研究棟地点 報告編」

古代歴史文化協議会共同調査研究事業「古墳時代の玉類」

伊藤雅文・中屋克彦・林　大智、西田昌弘（石川県教育委員会文化財課）

1．はじめに

日本の各地には、素晴らしい歴史文化遺産がある。これらの遺産については、それぞれに調査研究が進められ、各地域にその成果が蓄積されている。しかしながら、それらは地域ごとの研究成果としてまとめられることが多く、列島を俯瞰するような広い地域の調査研究として発信される機会は少ないのが実情である。

そこで、個々の地域研究では見えにくかった古代史の大きな流れを解明し、その成果を広く情報発信するために、古代歴史文化にゆかりの深い埼玉県、石川県、福井県、三重県、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、福岡県、佐賀県、宮崎県の14県が連携して、平成26年に「古代歴史文化協議会」を設立した。

この協議会の設立準備段階から、14県に共通して存在し、比較的容易に調査対象となる考古資料を研究することで、全国的に古代歴史文化研究の水準を高め、また新しい事実を発見することが期待できることなどを考慮して、多くの研究対象候補から「古墳時代の玉類」を最初の研究テーマとすることとなった。

それぞれの県の研究担当者が３年半にわたって調査研究を進め、各県で蓄積されてきた研究成果を比較検討する研究集会を重ねた。そしてその成果を成果図書『玉－古代を彩る至宝―』にまとめ、あわせて展覧会「玉－古代を彩る至宝―」を東京都江戸東京博物館と九州国立博物館で開催した。

今回はこの共同調査研究事業「古墳時代の玉類」について報告する。

2．参加の経緯と体制

古代歴史文化協議会は、古代歴史文化賞を主催していた古事記・日本書紀にゆかりの５県（島根県、奈良県、三重県、和歌山県、宮崎県）の知事が、平成26年１月に開催したシンポジウムの席上、古代の歴史文化に関する調査研究・情報発信を各県共同で行うことを提案し、古代の歴史文化にゆかりのある自治体に参加を呼びかけて設立された組織である。

石川県にも同年６月に参加の打診があり、本県の歴史的・文化的魅力を発信し、誘客につなげることができるなどの観点から、県文化財課を窓口に、（公財）石川県埋蔵文化財センターにも協力を得る形で参加することとなった。

各年度の担当は以下のとおりである。

平成26年度：県文化財課　土屋　　埋文センター　伊藤、澤辺、林、西田、関
平成27年度：県文化財課　土屋　　埋文センター　伊藤、澤辺、林、西田、関
平成28年度：県文化財課　土屋　　埋文センター　伊藤、中屋、林、西田、佐々木
平成29年度：県文化財課　伊藤、土屋　　埋文センター　中屋、林、西田、佐々木
平成30年度：県文化財課　伊藤、松山　　埋文センター　中屋、林、西田

3．「古墳時代の玉類」共同調査研究の歩み

（1）研究集会等

研究の進め方の検討会（奈良県）

開催日：平成26年10月20日（月）・21日（火）
会　場：奈良県立橿原考古学研究所
・研究の進め方（「古墳時代の玉類」の対象・時期・集成を中心に）、共同考察テーマについての意見交換

第１回研究集会（奈良県）
開催日：平成27年３月12日（木）・13日（金）
会　場：奈良県立橿原考古学研究所
・基調講演
「玉作りの研究史について」　島根県埋蔵文化財調査センター　岩橋孝典
「「玉」をめぐる研究について」（公財）石川県埋蔵文化財センター　伊藤雅文
・各県の成果報告、共同考察テーマの検討、分科会の設置と提案

第２回研究集会（島根県）
開催日：平成27年７月30日（木）・31日（金）、オプション ８月１日（土）
会　場：松江テルサ
・基調講演
「出雲玉作り研究の現状と課題」　岡山県古代吉備文化財センター　米田克彦
「文献史料からみた出雲玉作りについて」　島根県古代文化センター 平石　充
・その他の報告
「古墳時代玉類の材質分析調査報告」　奈良県立橿原考古学研究所　柳田明進
・研究報告、各県報告、共同考察テーマに即した分科会、中間研究発表会の打合せ
・オプション
［玉類資料・施設見学］島根県埋蔵文化財調査センター、出雲玉作資料館・史跡出雲玉作跡、八雲立つ風土記の丘

第３回研究集会（福岡県）
開催日：平成28年３月16日（水）・17日（木）、オプション18日（金）
会　場：福岡県吉塚合同庁舎
・基調講演
「水晶製玉作研究の展開と課題」　九州国立博物館　河野一隆
「福岡県の玉類研究に関する現状と課題」　福岡県教育委員会　吉田東明
・研究報告、共同考察テーマに即した分科会、次回研究集会の打合せ
・オプション
［玉類資料・施設見学］福岡市埋蔵文化財センター、九州歴史資料館

第４回研究集会（石川県）
開催日：平成28年７月27日（水）・28日（木）、オプション29日（金）
会　場：石川県女性センター
・基調講演
「石川県加賀地方における石製玉類の石材」（公財）石川県埋蔵文化財センター　西田昌弘
「古墳時代後期の玉の流通」　加賀市教育委員会　戸根比呂子
・研究報告、共同考察テーマに即した分科会、中間研究発表会の打合せ、成果図書の検討、展覧会の構想

・オプション

［玉類資料・施設見学］石川県埋蔵文化財センター、金沢市埋蔵文化財センター、加賀市教育委員会文化財保護課収蔵庫、［発掘調査現場見学］弓波遺跡

第５回研究集会（埼玉県）

開催日：平成29年２月１日（水）・２日（木）、オプション３日（金）

会　場：埼玉教育会館

・基調講演

「埼玉における古墳時代前期の玉作り遺跡とその背景」（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　赤熊浩一

・共同調査研究の取りまとめ、成果図書・シンポジウム・展覧会の打合せ

・オプション

［玉類資料・施設見学］埼玉県文化財収蔵施設、埼玉県立さきたま史跡の博物館

第６回研究集会（兵庫県）

開催日：平成29年８月１日（火）・２日（水）

会　場：兵庫県私学会館

・共同調査研究の取りまとめ、成果図書の編集・執筆方針、第３回講演会説明、展覧会の内容検討

第７回研究集会（奈良県）

開催日：平成30年１月25日（木）・26日（金）

会　場：奈良県立橿原考古学研究所

・共同調査研究の取りまとめ、成果図書の校正、展覧会の内容検討

第８回研究集会（島根県）

開催日：平成30年７月10日（火）・11日（水）

会　場：東京都江戸東京博物館、国際ファッションセンター

・成果図書の最終調整、展覧会の事前打ち合わせ・予定会場視察

第９回研究集会（福岡県）

開催日：平成31年１月30日（水）・31日（木）

会　場：福岡県庁吉塚合同庁舎、九州国立博物館

・第１期「古墳時代の玉類」の総括（江戸博企画展・成果図書・研究集会・講演会・成果発表の方法）、展覧会 九州国立博物館会場の視察

（２）講演会（中間研究発表会）等

第１回 古代歴史文化協議会講演会（第１回中間研究発表会）

「古墳時代の玉作りと神まつり」

・日　時：平成27年11月15日（日）14:30～17:30

・会　場：よみうり大手町ホール（東京都）（定員500名）

・主　催：古代歴史文化協議会、読売新聞社

・基調講演

「たまと玉作り－玉作り遺跡調査の回顧とまつりの玉－」

國學院大學名誉教授　椙山林継 氏

・パネルディスカッション

テーマ「玉作り遺跡の調査と研究」

コーディネーター　島根県教育庁文化財課長　丹羽野裕

埼玉県、石川県、奈良県、鳥取県、島根県の研究担当者

・入場者数：430人（事前申し込み488人）

・第１回 古代歴史文化協議会講演会資料『古墳時代の玉作りと神まつり』を発行

第２回 古代歴史文化協議会講演会（第２回中間研究発表会）

「玉から古代日韓交流を探る」

・日　時：平成28年12月10日（土）13:00 ～ 17:00

・会　場：よみうり大手町ホール（東京都）（定員500名）

・主　催：古代歴史文化協議会、読売新聞社

・招待講演

「古代韓半島における硬玉製勾玉の移入とその歴史的な背景」

韓国 慶北大学校教授　朴天秀（パク チョンス）氏

・パネルディスカッション

テーマ「東アジアにおける日本の玉類」

コーディネーター　奈良県立橿原考古学研究所所長　菅谷文則

朴天秀氏、福井県、奈良県、和歌山県、福岡県、宮崎県の研究担当者

・入場者数：350人（事前申し込み数451人）

・第２回 古代歴史文化協議会講演会資料『玉から古代日韓交流を探る』を発行

第３回 古代歴史文化協議会講演会（研究のとりまとめのシンポジウム）

「古墳時代の玉飾りの世界」

・日　時：平成29年11月18日（土）13:00 ～ 17:00

・会　場：よみうり大手町ホール（東京都）（定員500名）

・主　催：古代歴史文化協議会、読売新聞社

・基調講演

「玉類研究から古墳時代像を見直す」

奈良県立橿原考古学研究所所長　菅谷文則

・パネルディスカッション

コーディネーター　島根県教育庁文化財課長　丹羽野裕

テーマ①「古墳時代の玉飾りの世界」

三重県、兵庫県、奈良県、岡山県、広島県、佐賀県の研究担当者

テーマ②「古墳時代の玉類」

三重県、兵庫県、奈良県、岡山県、広島県、佐賀県、石川県、福岡県の研究担当者

・入場者数：400人（事前申し込み数521人）

・第３回 古代歴史文化協議会講演会資料『古墳時代の玉飾りの世界』を発行

（３）韓国現地調査

平成27年度　新羅地域玉類調査

・期　間：平成27年12月21日～ 12月24日　　３泊４日

・内　容：新羅古墳から出土した玉類を対象とする自然科学分析（蛍光X 線分析、比重測定）、考古学的調査（実測・写真撮影）。

嶺南大学校博物館：慶山林堂洞古墳群出土の翡翠製勾玉

慶北大学校博物館：慶州皇吾洞34号墳出土の翡翠製勾玉、慶州味鄒王陵古墳群出土の翡翠製勾玉、碧玉製勾玉ほか

・参　加：島根県、福岡県、奈良県の９名

・嶺南大学校博物館紀要『継往開来』第15号（2015年）に調査成果を発表

平成28年度　加耶地域玉類調査

・期　間：平成28年８月28日～８月31日　　３泊４日

・内　容：加耶古墳から出土した玉類を対象とする自然科学分析（蛍光X 線分析、比重測定）、考古学的調査（実測・写真撮影）。

慶尚大学校博物館：陜川玉田古墳群出土の翡翠製勾玉、金製勾玉

釜山大学校博物館：東萊館福泉洞古墳群出土の翡翠製勾玉

福泉博物館：東萊福泉洞古墳群出土の翡翠製勾玉ほか

・参　加：石川県、島根県、福岡県、奈良県の10名

平成29年度　百済地域玉類調査

・期　間：平成30年２月27日～３月２日　　３泊４日

・内　容：百済古墳から出土した玉類を対象とする考古学的調査（実測・写真撮影）。

国立羅州文化財研究所：霊岩沃野里方台形古墳、高興野幕古墳、羅州丁村古墳、羅州大安里方斗古墳出土玉類（翡翠製勾玉、碧玉製勾玉を含む）

・参　加：埼玉県、島根県、福岡県、奈良県の８名

（４）ホームページの開設

古代歴史文化協議会ホームページ

・開設日：平成28年11月24日

URL　http://kodairekibunkyo.jp/

・古代歴史文化協議会主催のイベント（講演会、展覧会）のほか、参加各県単独主催のイベントなどの案内を掲載。

・14県の集成による約5,300遺跡の「玉出土遺跡データベース」（玉類出土古墳・集落遺跡データ、玉作り関連遺跡データ、文献データ 等）を掲載。

（５）成果図書

『玉－古代を彩る至宝－』（ハーベスト出版、定価1,800円＋税）の刊行

・A5判　フルカラー　本文229ページ

・平成30年10月９日刊行、初刷3,000部

・同年11月下旬　第２刷2,000部増刷

（6）展覧会

東京都江戸東京博物館

・期　間：平成30年10月23日（火）～12月9日（日）
・会　場：東京都江戸東京博物館 常設展示室内5F企画展示室
・主　催：東京都、東京都江戸東京博物館、古代歴史文化協議会
・展示品：74件　約12,000点（国宝1件、重要文化財8件を含む）
・観覧者数：60,234人
・関連行事：連続ミニ講座　計14回（各県1回担当）、参加者のべ712人
　　ミュージアムトーク　計3回（奈良、島根、福岡の幹事県3県）、参加者のべ112人

九州国立博物館

・期　間：平成31年1月1日（火・祝）～2月24日（日）
・会　場：九州国立博物館 文化交流展示室内3室
・主　催：九州国立博物館、福岡県、古代歴史文化協議会
・展示品：70件　8,146点
・観覧者数：49,351人

東京都江戸東京博物館展覧会場

東京会場の様子

八日市地方遺跡出土品（重要文化財）

雨の宮1号墳出土品（重要文化財）

九州国立博物館展覧会場

九州会場の様子

4．集成作業と石川県の様相

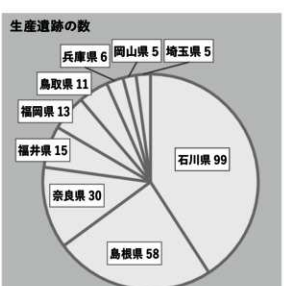
古墳時代には、多様な素材を用いて勾玉、管玉をはじめとした様々な玉類が作られ、使われていた。その数は全国で数十万個にも及び、その膨大さから総括的な研究も難しい状況であった。

そこで、古代歴史文化協議会に参加する14県は、まずそれぞれの県で一体どれぐらいの数の玉類が出土しているのかを知るため、データベースを作成することとした。一点一点の資料を正確に把握する積み上げ作業こそ、基礎的な科学的データとして研究の裏付けとなるからである。

集成作業は、主に発掘調査報告書や自治体史誌などを紐解いての悉皆的な調査を基本としたが、物によっては実物の観察も行い、集落・古墳などの「消費遺跡」からの出土例と、玉作り遺跡などの「生産遺跡」とに分けて作業を進めた。

14県の集成データは、古代歴史文化協議会ホームページからダウンロードできるようになっており、誰でもが研究材料として利用可能である。ただ、集成データは報告書などの記載内容を基本としており、県によりデータの種類が異なっていたり、文言の揺れや精度のばらつきがあることも否めないことから、取り扱いには注意が必要である。

石川県においては、平成27年7月に各市町教育委員会に協力を依頼し、最終的には消費遺跡で174遺跡13,779点、生産遺跡で99遺跡11,707点もの集成作業となった。ご協力いただいた各市町担当者の方々には、この場を借りて感謝申し上げたい。



石川県の集成結果で特筆されることは、生産遺跡が飛び抜けて多いことである。14県以外のデータを持ち合わせていないが、複数の玉作り遺跡の報告がある滋賀県、京都府、富山県、新潟県などを加えても、その数は突出しているものと考えられる。

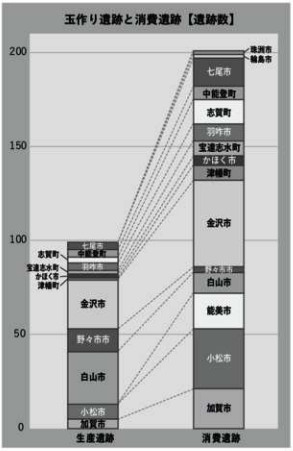
生産遺跡は、良質の碧玉や緑色凝灰岩を産出する南加賀や北加賀の山間部を背景に、加賀地域の平野部を中心に分布しているが、七尾市東三階A遺跡や羽咋市太田ニシカワダ遺跡など、石材の産地から離れた能登でも玉作りが行われている。

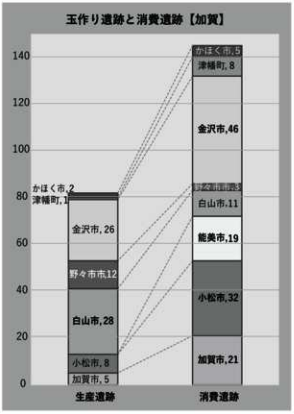
また、加賀市片山津玉造遺跡のような専業化した集落が存在する一方、わずかな未成品等の出土

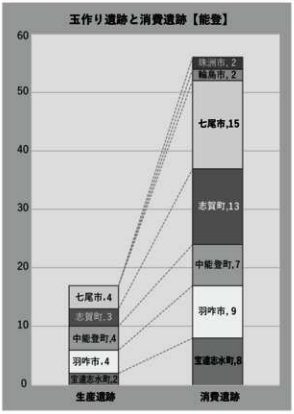
にとどまる集落が多数あり、多様な生産の様相を垣間見ることができる。

次に、生産遺跡と消費遺跡の関係をみると、金沢、野々市、白山の北加賀地域で遺跡数では生産遺跡の70％近くを占めるが、同地域での消費遺跡数は30％程度にとどまる。これに対し、生産遺跡が13％程度の南加賀にあっては、消費遺跡が35％を占める。主要な生産地域と玉類を保有する人物の、墓域を含む生活域が必ずしも一致していないことが分かる。

もう1つ注目すべきことは、弥生時代中期に小松市八日市地方遺跡や羽咋市吉崎・次場遺跡などの拠点集落で始まった碧玉の管玉や翡翠の勾玉を中心とするこの地域での玉作りが、碧玉製宝器類の独占的生産の時期を経て、古墳時代前期でほぼ終息するということである。これは、この時期を境に祭祀の形態が変化し、権威や権力を表す器物が、玉や石製品から武器や武具などに移っていったことや、玉に対する価値観の変化などと連動した動きとみることができ、畿内大王権と北陸や他地域との関係が大きく変化したことを読み取ることができる。







集成作業では遺跡数のほか、玉の出土点数についても集成を行っているが、1件で膨大な出土点数がある臼玉や小玉などが含まれており、少数の出土が一般的な勾玉などと同列に扱うことが適当ではないため、玉の種類ごとあるいはテーマを設定し、それに沿ったデータ抽出を行ったうえで検討を加える必要があろう。

ここでは、今回の集成作業から読み取ることができた石川県内の概略を示したが、基礎となる14県のデータを、研究材料として積極的に活用願いたい。

5．14県共同調査研究の成果

共同調査研究ではこの集成作業を通じ、「古墳時代の玉類」の状況に各県（地域）ごとの特徴が現れることを重視し、研究のアプローチ方法を3つに分けて考え、それぞれに分科会を設置した。玉類を生産した遺跡や玉類の生産技術などの分析・研究を行う「玉類生産遺跡の研究」分科会。集落遺跡や古墳など、玉類を消費した遺跡での出土状況などから、古墳時代の玉類がもつ社会的機能とその流通の研究を行う「玉類の流通と消費の研究」分科会。そして、日本国内に留まらず、大陸や朝鮮半島から日本に持ち運ばれた玉、あるいは日本から朝鮮半島に渡った玉から、古墳時代の国際交流を考える「東アジア世界における日本の玉類」分科会である。

それぞれの分科会で検討を重ね、それを集約した結果、弥生時代から飛鳥時代に至る玉の生産体制の変遷、社会的機能やその意義の変化、朝鮮半島やアジア各地との交流など、玉類をめぐる動きが、当時の日本列島における社会の大きな動きと連動したものであったことが明らかになった。

日本海側一帯は、緑色凝灰岩や碧玉、火山性の鉱物や岩石を産出するグリーンタフ地帯として知られている。北陸は特に良質なそれらの石材を産出することから、弥生時代中頃から玉の一大生産地となった。玉に利用された石材は、碧玉、緑色凝灰岩、鉄石英などほのか、糸魚川市姫川流域周辺で産出する翡翠などであり、紀伊半島から四国で産出する紅簾片岩の石鋸を用いた施溝分割技法で玉作りが行われている。また、モノだけでなく、工人が関東地方などに移動して玉作りをはじめるなど、広域の地域間交流があったことが明らかになっている。

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭という日本列島の広い範囲で社会の仕組みが変わる時、玉作りの体制にも変化が生じ、技術的にも鉄器の使用が一般的になる。大和を中心とする強大な権力が出現した古墳時代前期前半頃、鏡を大量に副葬する古墳、例えば京都府椿井大塚山古墳、奈良県黒塚古墳、兵庫県西求女塚古墳など畿内の古墳では、鏡や鉄剣などの副葬品は目立つが、玉類の副葬はほとんどみられない。古墳での副葬が低調なこの時、山陰・北陸など弥生時代に玉作りの拠点であった地域でも、玉作り集団の再編に伴い玉生産が縮小・集約される時期がみられる。このことは、玉作り集団たちも社会の急激な変動とは無縁でなかったことのあらわれと考えられる。ただこの時期、北陸は大和の王権と強い結びつきを持ち、各地の有力古墳に副葬される鍬形石や車輪石、石鋼を中心とした碧玉製宝器類を独占的に生産する。

前期中頃からは古墳に副葬される玉類が再び増加しはじめる。この頃は、翡翠製勾玉を中心に碧玉製管玉を連ねた頸飾りが好まれた。その生産は、翡翠や碧玉を産出する北陸を中心として活発に行われた。

一方、山陰（出雲）で玉作りが再び活発になるのは前期後半である。それまで主体であった碧玉に加え、メノウ、水晶を素材として勾玉の生産を開始し生産量を増やす。それまでも赤い勾玉はコハクでは作られていたが極めて希少であった。しかし、玉に利用される素材が増え、メノウの赤、水晶の白・透明、ガラスの青・黄色など、玉の色彩が豊かになったことで、相対的に翡翠や碧玉・緑色凝灰

岩の緑に対する価値観が低下したのかも知れない。

畿内中枢では、前期末から大和の奈良県曽我遺跡において、集中的に玉作りを始める。この工房には全国から玉作り工人と石材、道具類が集められ、ほかに例を見ないほどの大規模な生産が行われた。出雲の工人は、曽我遺跡での玉作りの技術的中心となって中央での生産活動に携わったほか、地元の出雲においても玉生産を行っている。

こうした流れの中で、古墳時代中期には再び玉作りの画期が訪れる。それまで最大の玉生産地帯であった北陸の玉作りが終焉を迎える。

さらに、古墳時代後期に入ると、全盛を誇った曽我遺跡での玉生産に変化が訪れる。それまで畿内中枢の膝元に集められて生産活動をしていた各種工人は、原料調達などの実態に即して生産場所を変えたのである。

こうした動きは、鉄製武器・武具類やそれらの滑石製模造品などが重宝されることにより、祭祀の道具あるいは装身具、副葬品などとしての玉類の需要が低下したことの現れとみることができるのではないだろうか。

こうして、後期中頃から、日本列島での大規模な玉作りは出雲花仙山周辺に収斂されていった。その後、飛鳥時代中頃まで「古墳時代的」な玉生産が行われているが、律令制度が始まる7世紀後半には玉作りは急速に衰退していく。

玉は、弥生時代に装身具として作られ始め、交易品として各地へ運ばれる。古墳時代には畿内の王権や各地の首長の権威・権力の象徴として重要視されたが、武人が活躍する中期以降は玉に対する価値観が変化する。さらに、律令国家の新システムが成立するとその役割を終える。14県が研究成果を持ち寄ることにより、こうした大きな流れを、列島規模でダイナミックに俯瞰することが可能となったことは、共同調査研究の目的の一つであり大きな成果である。

さらに詳しい解説は、成果図書『玉－古代を彩る至宝―』を是非ご覧いただきたい。玉の歴史的意義や基本知識が程良く学術的及び一般向けのバランスがとれた内容となっており、古墳時代の玉を理解するための教科書的な1冊との評価も得ているところである。

6．おわりに

冒頭にも書いたが、共同調査研究の最初のテーマとして「古墳時代の玉類」を3年半にわたって調査研究し、成果図書の刊行と展覧会の開催で一区切りを付けたところである。協議会では、その反省点や課題を総括し、それを踏まえたうえで、すでに第2期のテーマを「弥生・古墳時代の刀剣類」として調査研究のスタートを切っている。玉類に引き続き、共同調査研究事業の広域性が強みとなるテーマであり、これも大きな成果を期待したい。

古代能登の挽物について

久田正弘

1．はじめに

石川県内では、古代～中世の木製食器については先行研究により体系（川畑1994・1996、四柳1991など）づけられた。近年、能登地方の木製品の資料が増加しつつある中で、四柳ミッコ遺跡などからスギの盤が多く出土したので、樹種から古代能登の挽物についてまとめてみたい。なお、実測図は木取りの間違い（久田2017）などを含めて、訂正したものがあることを断っておく。

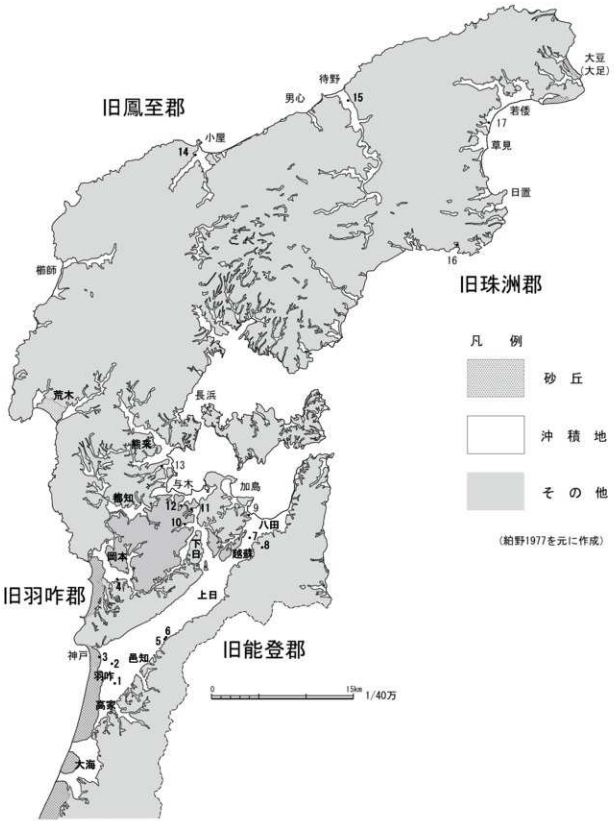
2．挽物の事例

能登国は、718年（養老２年）に越前国から羽咋（はくい）・能登（のと）・鳳至（ふげし）・珠洲（すず）郡を割いて成立したが、741年（天平13年）に越中国に併合され、757年（天平宝字元年）に再び分国した。羽咋郡は大海（おおみ）・荒木（あらき）・高家（たかや）・羽咋（はくい）・岡本（おかもと）・邑知（おうち）・都知（つち）・神戸（かんべ）、能登郡は上日（あさひ）・下日（そのひ）・越蘇（えそ）・八田（やた）・加島（かしま）・与木（くみき）・熊来（くまき）・長浜（ながはま）、鳳至郡は鵠師（くしし）・小屋（なしふ）・男心（まちの）・待野（あるべ）・余戸（あまるべ）、珠洲郡は日置（ひき）・草見・若倭・大豆（大足）・余戸（あまるべ）である（第１図）。郷の比定については平凡社1991『石川県の地名』と当センター職員等の意見を参考に作図した。郷の比定については、中世～現代の地名や文献などから様々な意見があるようだが、水田利用可能地（沖積地）を念頭に置いて配置を試みた。

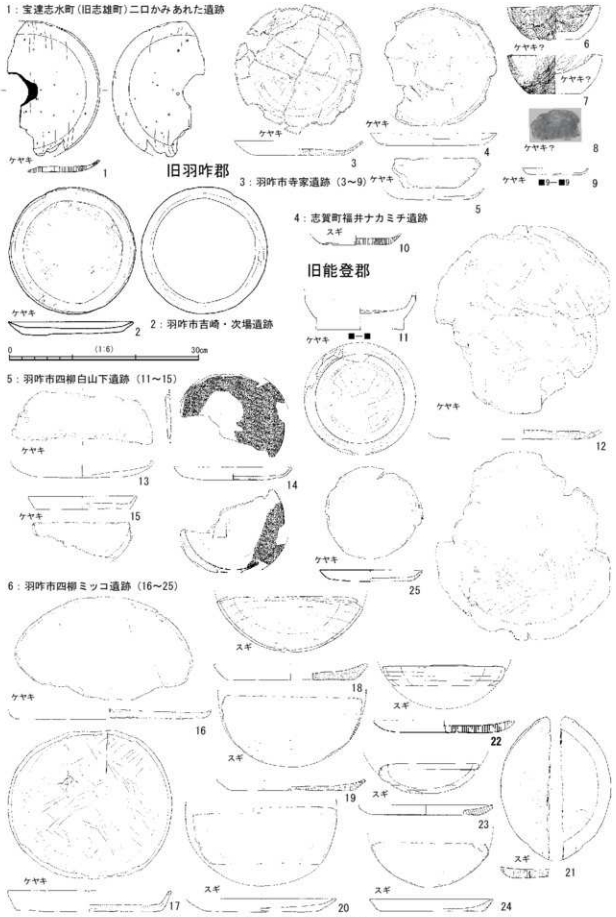
旧羽咋郡内からは第２図１～25が出土した。第１図１宝達志水町（旧志雄町）二口かみあれた遺跡から第２図１が出土（上野ほか1995）した。１は22cm程度の盤（ケヤキ）であり、口縁部の立ち上がりが浅い。中央に丸い孔があるので甑の簀子などに転用されたようだ。第１図２羽咋市吉崎・次場遺跡から第２図２が出土（福島ほか1988）し、ケヤキで直径20.2cmである。第１図３羽咋市寺家遺跡から第２図３～９が出土した。第11次調査（土屋ほか1997）では３～５が出土し、ケヤキで３・４は直径21～20cm程度、５はそれ以下と思われる。10世紀後半～11世紀前半とされるが、須恵器から古い時期は８世紀後半からと幅を持たせたい。第４次調査（谷内1982）では６～９が９世紀前半の土坑から出土した。６～８は荒型であり、工具でカットした面（第６図７、四柳ほか2011）があり、肉眼観察では３点ともケヤキと判断した。９は内外黒漆の多層塗であり、ケヤキである（四柳1991・1997）。第１図４羽咋郡志賀町福井ナカミチ遺跡から第２図10が出土（川畑ほか2017）した。直径16cm程度と思われ、肉眼観察でスギと判断した。

旧能登郡からは第２図11～第４図57が出土した。第１図５羽咋市四柳白山下遺跡から第２図11～15が出土した。11はケヤキの漆器椀（川畑ほか2005）であり、内外面は黒漆で底部は厚く、４つのロクロ爪痕があるようだ。12～15はＥ地区出土（川畑ほか2017）であり、14以外はケヤキである。12は直径30cm程度の大型品であり、13は直径22cm以上、14は直径19cm、15は18cm前後である。12・14・15は内面の底面は水平に近いが、13は中央が窪むようだ。第１図６羽咋市四柳ミッコ遺跡から第２図16～25が出土（林ほか2015）した。16・17・25はケヤキ、18～24はスギである。ケヤキの16は直径30cm以上の大型であり、17は直径26cmで口縁部は深い。スギの18～22は直径24～25cm前後、22・23は直径22～23cm前後、24は直径20cm前後で、25は直径17cm弱と推定され、直径では数グループが確認される。

第１図７七尾市能登国分寺跡から第３図26・27が出土（土肥ほか1989）した。26は総黒色の漆器であり、直径は22cm程度で厚さ１mm程度の黒漆が塗られた優品であるという。９世紀前半の墨書土



第1図　古代の挽物出土遺跡の位置



第2図　古代能登の挽物1

器と共伴し、大興寺の時期と思われる。27は北側区画溝からの出土（土肥ほか1986）なので能登国分寺の時期と思われる。第１図８小池川原地区遺跡から第３図28・29が出土（岡田ほか1990）出土し、総黒色の漆器椀だが排水溝からの出土なので詳細は不明である。古代ならばケヤキと思われる。第１図９七尾市小島西遺跡から第３図30 ～ 34が出土(大西ほか2008)した。30 ～ 33はケヤキであり、34はスギである。30は直径30cm以上の大型、34は26cm前後、31・32は21cm程度、33は16cm程度と思われる。

第１図10七尾市（旧田鶴浜町）吉田Ｃ遺跡から第３図35が出土（岩瀬2004）した。肉眼観察ではスギであり、直径は20cm弱で中央に円形の孔を持つので甑の簀子に転用されたと思われる。第１図11七尾市（旧田鶴浜町）杉森テラアト遺跡から第３図36が出土（三浦1991）し、写真からスギと判断した。第１図12七尾市（旧田鶴浜町）三引遺跡から第３図37 ～ 46が出土（滝川ほか2001・小島ほか2003）した。古代から中世にかけての木製品が河道などから多数出土し、スギは37 ～ 43、ケヤキは44 ～ 46が報告された。37は直径30cm弱、38は28cm程度、39・40は25cm程度、45は20cm程度、44は18cm前後と思われる。38は口縁部の立ち上がりは高く、41も高い可能性があるが、他は口縁部の立ち上がりは低い。

第１図13七尾市（旧中島町）下笠師Ｅ遺跡から第４図47 ～ 57が出土（中島1997）した。47 ～ 56の荒型が１号土坑（深さ140cm）から出土し、盤は大（46、26cm程度）中（48 ～ 51、21cm程度）小（52 ～ 55、17cm程度）があり、56は椀（14cm）であろう。肉眼鑑定ではケヤキと判断した。57は古代～中世の鞍部からの出土であり、第１図11の類例から古代の可能性があろう。実測図では外面にカット面が残っているようなので、外面は製作途中なのかもしれない。

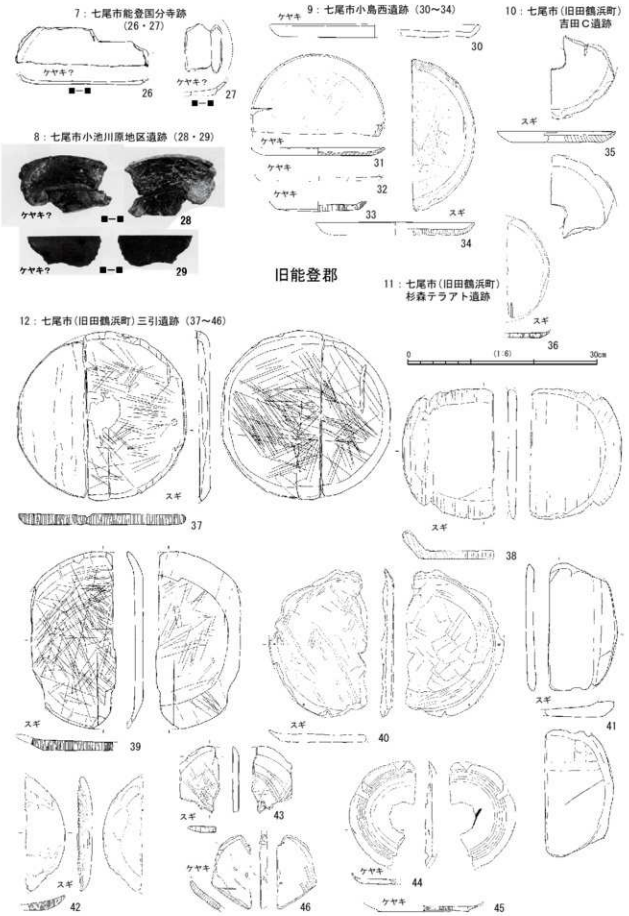
旧鳳至郡では、第５図58 ～ 60が出土している。第１図14輪島市釜屋谷Ｂ遺跡から58が出土(砂上・四柳1997)した。直径42cmの大型の盤であり、中央部は浅い。外面は黒色漆が２層、内面には１層が残っているが内面も２層塗と思われる。第１図15輪島市町野町時国古屋敷遺跡から59・60が出土（安ほか2000）した。共にケヤキの漆器盤であり、横組み井戸（59）と区画溝（60）から出土した。しかし、60は薄造りなので、２点はロクロ挽き・塗・使用に至るまで格差が大きい（安ほか2000）という。

旧珠洲郡では、第５図61 ～ 67が出土した。第１図16能登町(旧能都町)真脇遺跡から61 ～ 66が出土(高田ほか1986）し、盤（61 ～ 64）と荒型２点（65・66）がある。65は５個のロクロ爪痕が残っている。61・62は直径25 ～ 26cm程度、63は直径22cm程度、64は直径18cm程度である。写真から樹種を判断したが確証はない。第１図17珠洲市南方遺跡から67が出土（宮川2005）し、直径14cmの小型である。

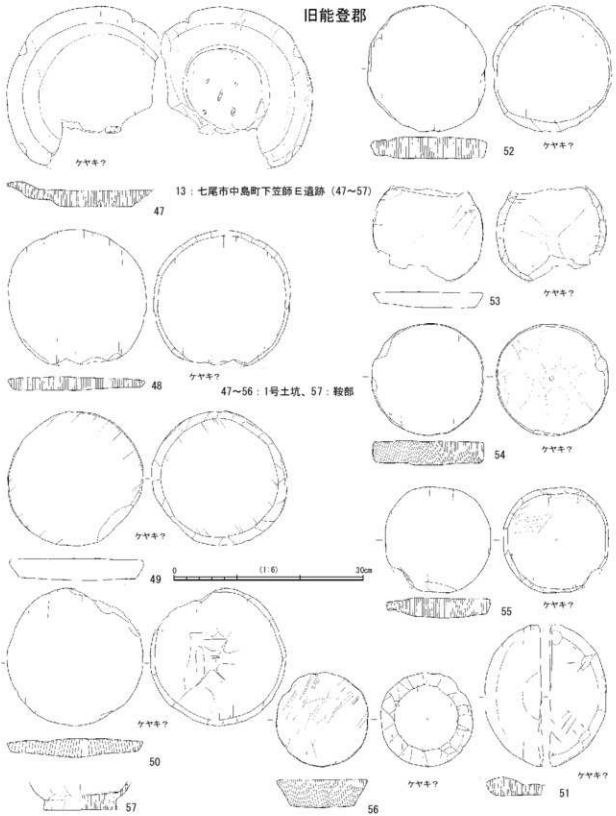
３．遺跡の性格

羽咋郡の状況をみてみたい。二口かみあれた遺跡は邑知潟の湖南ブロックに属する集落であり、湖南ブロックは墨書土器から郷の領域の可能性が示唆（三浦2017）されている。寺家遺跡第４次（第２図５～８）は気多大社に付属する工房（四柳1991）であり、寺家遺跡全体は古代気多神社と関連施設群（牧山ほか2010）である。福井ナカミチ遺跡は福野潟湖畔に立地し、製塩の管理施設で一時的に宗教施設が存在（川畑ほか2017）したようである。

能登郡の状況をみてみたい。四柳白山下遺跡は下日郷末端官衙（川畑ほか2019）、その北東に隣接する四柳ミッコ遺跡も与木郷関連施設（林ほか2015）とされた。長年比定が困難だった与木郷は、「『和名類聚抄』では『能登郡　上日　下日　越蘇　八田　与木　熊木　長浜　神戸』、『能登国四郡公田田数目録案』では『鹿島郡　上日庄　越曽　八田郷　与木院　熊来院』と記載され（中略）南から北に記載されていることが確認」されたので、与木郷は七尾市（旧田鶴浜町）大津周辺に比定（三浦



第３図　古代能登の挽物２



第４図　古代能登の挽物３

14：輪島市釜屋谷B遺跡

ケヤキ　■2－■2　58

15：輪島市時国古屋敷遺跡（59・60）

旧鳳至郡

旧珠洲郡

16：能登町(旧能都町)
真脇遺跡（61～66）

ケヤキ　59

ケヤキ　60

0　(1:6)　30cm

ケヤキ?　61

スギ　62

スギ?　63

ケヤキ?　65

ケヤキ?　66

スギ　64

17：珠洲市南方遺跡　67

第５図　古代能登の挽物４

羽咋市寺家遺跡

ケヤキ?　6（5?）

七尾市中島町オカ遺跡

ケヤキ　68

0　(1:6)　30cm

珠洲市柏原ミツハシ遺跡

スギ　69

現代輪島塗木地の荒型（四柳2018）

70

第６図　古代～現代までの能登の挽物粗型

71

カタウチ

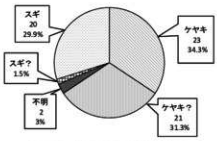
72

ナカキリ（展示品）

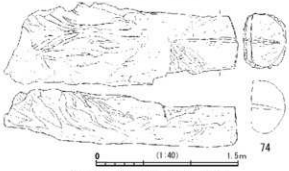
73

ナカキリ

第７図　糸魚川大所地区木地屋民俗資料館の荒型（図録・展示品）



第８図　古代能登の挽物の樹種



第９図　杉野屋遺跡のケヤキ材

遺跡	番号	国郡	現在市町名	旧市町村名	遺跡名	報告番号	器種	樹種	口径	底径	器高	塗など	時期	備考
1	1		安達市水町	市浦町	二日かみあれた	W13	盤	ケヤキ	226		22		8後～9前	
2	2		羽咋市	羽咋市	吉崎次郎	130図13	盤	ケヤキ	202	160	21		平安	
3	3		羽咋市	羽咋市	寺家	23図72	盤	ケヤキ	206	140	23		8後～11前	
	4		羽咋市	羽咋市	寺家	18図19	盤	ケヤキ	200	160	20		8後～11前	
	5	旧羽咋郡	羽咋市	羽咋市	寺家	18図18	盤	ケヤキ					8後～11前	
	6		羽咋市	羽咋市	寺家	17	椀	ケヤキ？	150	80	60	荒型	9前	
	7		羽咋市	羽咋市	寺家	16	椀	ケヤキ？	150	80	60	荒型	9前	
	8		羽咋市	羽咋市	寺家		椀	ケヤキ？	147	78	50	荒型	9前	
	9		羽咋市	羽咋市	寺家	18	盤	ケヤキ？	95	75	12	総黒漆	9前	多層塗
4	10		志賀町	志賀町	福井ナカミチ	45図325	盤	スギ		112			8前～9後	
5	11		羽咋市	羽咋市	四柳白山下	45図136	椀	ケヤキ		140		総黒漆	8後～9前	爪痕４？、Ⅰ
	12		羽咋市	羽咋市	四柳白山下	47図123	盤	ケヤキ					8前～9後	Ⅲ
	13		羽咋市	羽咋市	四柳白山下	70図174	盤	ケヤキ		172	19		7後～8後	Ⅲ
	14		羽咋市	羽咋市	四柳白山下	40図60	盤	不明	188	160	21		8前～9後	Ⅲ
	15		羽咋市	羽咋市	四柳白山下	64図157	盤	ケヤキ			21		8前～9前	Ⅲ
6	16		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	105図502	盤	ケヤキ	320	297	16		7後～8後	B区
	17		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	105図501	盤	ケヤキ	260	220	34		7後～8後	B区
	18		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	105図503	盤	スギ	238		25		7後～8後	B区
	19		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	104図497	盤	スギ	224		18		7後～8後	B区
	20		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	104図496	盤	スギ	227		21		7後～8後	B区
	21		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	104図498	盤	スギ	226		16		7後～8後	B区
	22		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	104図500	盤	スギ	210		16		7後～8後	B区
	23		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	104図99	盤	スギ	212		13		7後～8後	B区
	24		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	167図59	盤	スギ	186		19		古代	E区
	25		羽咋市	羽咋市	四柳ミッコ	104図495	盤	ケヤキ	154	148	7		7後～8後	B区
7	26		七尾市	七尾市	能登国分寺跡	77図208	盤	ケヤキ？				総黒漆	9前	4次
	27		七尾市	七尾市	能登国分寺跡	11図1	盤	ケヤキ？				総黒漆	9後～10中	7次
8	28		七尾市	七尾市	小池川原地区	図版20	椀	ケヤキ？		168		総黒漆	8中～末	
	29		七尾市	七尾市	小池川原地区	図版20	椀	ケヤキ？				総黒漆	8中～末	
9	30	旧能登郡	七尾市	七尾市	小島西	2257	盤	ケヤキ	330	174	21		古代	
	31		七尾市	七尾市	小島西	2255	盤	ケヤキ	212	174	13		古代	
	32		七尾市	七尾市	小島西	2258	盤	ケヤキ					古代	
	33		七尾市	七尾市	小島西	2259	盤	ケヤキ			17		古代	東
	34		七尾市	七尾市	小島西	2256	盤	スギ	249	201	21		古代	
10	35		七尾市	田鶴浜町	吉田Ｃ	14図66	盤	スギ	180	144	17		8中～9後	
11	36		七尾市	田鶴浜町	杉本テラアト	8図23	盤	スギ					弥生	
	37		七尾市	田鶴浜町	三引	64図382	盤	スギ	266		20		古代	東
	38		七尾市	田鶴浜町	三引	75図14	盤	スギ	202		42		古代	10区
	39		七尾市	田鶴浜町	三引	64図383	盤	スギ	279		16		古代	東
	40		七尾市	田鶴浜町	三引	35図3	盤	スギ					古代	5区
12	41		七尾市	田鶴浜町	三引	64図384	盤	スギ	201		24		古代	東
	42		七尾市	田鶴浜町	三引	86図28	盤	スギ					古代	11区
	43		七尾市	田鶴浜町	三引	76図16	盤	スギ					古代	10区
	44		七尾市	田鶴浜町	三引	35図2	盤	ケヤキ	166	75	18		古代	5区
	45		七尾市	田鶴浜町	三引	114図56	盤	ケヤキ		140			古代	13区
	46		七尾市	田鶴浜町	三引	70図293	盤	ケヤキ					古代	7区
13	47		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	13図1	盤	ケヤキ？				荒型	8後	
	48		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	14図3	盤	ケヤキ？	219		22	荒型	8後	
	49		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	13図2	盤	ケヤキ？	218		34	荒型	8後	
	50		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	14図4	盤	ケヤキ？	218		30	荒型	8後	
	51		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	14図5	盤	ケヤキ？	225		24	荒型	8後	
	52		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	15図6	盤	ケヤキ？	190		34	荒型	8後	
	53		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	16図9	盤	ケヤキ？	175		22	荒型	8後	
	54		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	15図7	盤	ケヤキ？	177		37	荒型	8後	
	55		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	15図8	盤	ケヤキ？	168		32	荒型	8後	
	56		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	16図10	盤	ケヤキ？	15	100	4.5	荒型	8後	
	57		七尾市	中島町	下笠師Ｅ	12図24	椀	ケヤキ？		116			8後～中世	
14	58	旧鳳至郡	輪島市	鳳至谷	宝屋谷B	図1-1	盤	ケヤキ	420	396	15	総黒漆	9後～10前	漆2層塗
15	59		輪島市	輪島市	時国古屋敷	28図1	盤	ケヤキ	213	143	13	総黒漆	9後～10前	
	60		輪島市	輪島市	時国古屋敷	28図3	盤	ケヤキ	191	137	19	総黒漆	9後～10前	
16	61	旧珠洲郡	能登町	能登町	真脇Ｘ区	図5-10	盤	ケヤキ？	256		22		8後～9後	P450
	62		能登町	能登町	真脇Ｘ区	図5-8	盤	スギ	250				8後～9後	P450
	63		能登町	能登町	真脇Ｘ区	図5-9	盤	スギ？	244				8後～9後	P450
	64		能登町	能登町	真脇Ｘ区	図5-7	盤	スギ	180				8後～9後	P450
	65		能登町	能登町	真脇Ｘ区	図5-14	盤	ケヤキ？	100		25	爪痕５	8後～9後	P450
	66		能登町	能登町	真脇Ｘ区	図5-13	盤	ケヤキ？	96		18		8後～9後	P450
17	67		珠洲市	珠洲市	南方	6図24	盤	不明	140		16		8後～10前	
	68		七尾市	中島町	オカ	図2-1	椀	ケヤキ				荒型	12前～13前	
	69		珠洲市	珠洲市	柏原ミツハシ	115	皿	スギ	112	104	20	荒型	12後	
	70		宝達志水町	志雄町	杉野屋	30図294	材	ケヤキ	251	幅88	高55		古代	3段階の加工

2017）された。その論理に従えば、能登郡最初は上日郷、次が下日郷であろう。下日郷は中世には上日庄に含まれ、その後上日庄の中心地になり、上日の地名が現代に継承されたのではなかろうか。能登国分寺跡は定額寺の大興寺が国分寺に転用した遺跡である。小池川原地区遺跡は、官人の居宅跡か官衙関連施設とされたが、鞴の羽口や舞羽・鍛かけ（第37図21・22）から官衙関連工房と管理施設と思われる。小島西遺跡は能登国府ないし香島津に付属した祭祀場（大西2008）なので、加島郷に属すると想定したい。吉田Ｃ遺跡は調査区幅が狭いこと、杉本テラアト遺跡と三引遺跡は河道・鞍部出土からの出土なので遺跡の性格は不明であるが、スギがやや多い。下笠師Ｅ遺跡は、能登国衙

ないし能登郡衙に付属した工房（四柳1991）とされたが、調査区幅が狭いために詳細は不明である。

鳳至郡の状況をみてみたい。釜屋谷B遺跡は鳳至郡小屋郷の中心部なので、鳳至郡の官衙関連遺跡（四柳1997）とされ、時国古屋敷遺跡は、待野駅が廃止された後の待野郷の官衙関連施設（安ほか2000）とされている。珠洲郡の状況をみてみたい。真脇遺跡は当時珠洲郡日置郷に属したようで、荒型や漆付着須恵器無台坏があるので郷に付属した工房が存在した可能性があろう。南方遺跡は調査範囲が狭いために詳細は不明である。

古代の盤などが官衙関連施設から出土するのは、多くの報告書や論文（川畑1996など）で指摘され、神社（寺家遺跡）や国衙・郡衙（下笠師E遺跡）や郷（真脇遺跡）で工房が付属した可能性があろう。寺家遺跡と下笠師E遺跡の樹種は全てケヤキであり、他の遺跡ではケヤキもあるがスギが多く存在する。旧能登国出土の67点中ケヤキ23点：ケヤキ？21点：不明２点：スギ？１点：スギ20点であり、ケヤキ系65.7％：スギ系34.3％（第７図）である。ケヤキが主体なのは河北郡津幡町加茂遺跡でも確認（ケヤキ９点69.2％：スギ２点15.3％：トチノキ２点15.3％）される（浜崎ほか2009・和田ほか2018）。能登国の挽物は、上位の遺跡ではケヤキが主体、下位の遺跡ではケヤキもあるがスギも多いことが確認された。

荒型から製品にする作業は、昭和の糸魚川市大所地区（重要有形文化財）での工程段階はカタウチ（側面をカット、70）、ナカキリ（内側を抉る、71・72）、アラビキ、ナカビキ、シアゲ（小椋ほか2006）である。遺物では、48～50・52～57がカタウチ、６～８・68がナカキリ、７・65・66はナカビキかシアゲが壊れたものと判断した。ナカキリは外面の上下を３段程度に分けて多面体でカットし、内面をチョウナで抉っるが、６（古代）、68（中世）、71・72（昭和）、73（現代）であるが、刃幅以外はあまり差がないと思われる。

珠洲市柏原ミツハシ遺跡では、12世紀後半の井戸から漆器椀２点（ケヤキとトネリコ属）と69（スギ）が出土し、69は漆器荒型としたいがスギから曲物底板とされた（岩瀬ほか2004）。しかし、70は形状からみてカタウチの可能性が高く、スギを利用した挽物は古代からの伝統で能登では中世初頭まで存在した可能性が想定されよう。第8図70は宝達志水町（旧志雄町）杉野屋遺跡から出土したケヤキ材（澤辺ほか2011）である。長さ251㎝幅88㎝厚さ55㎝で根を含む材であり、川跡から出土した。廃棄後に貴重なケヤキ材を再利用するために図右側の切断を試みたが、堅くて途中で放棄したのであろう。

挽物盤は儀器的使用（川畑1994）と数法量により共用的性格を持つ（川畑1996）という。古代の木盤・漆盤のサイズは『延喜式』『観心寺勘録縁起資財帳』から、小盤（５寸148㎜～６寸177.6㎜未満）、中盤（６寸以上～１尺2960㎜未満）、大盤（１尺以上１尺７寸503.2㎜程度）があるという（四柳1997）。大盤は11・15・57があり、すべてケヤキである。小盤は８・14・24・32・43がケヤキであり、63・69はスギの可能性もあり、直径10・14・16㎝のサイズが確認される。中盤は20～22㎝程度（７～7.5寸）、24～25㎝程度（８～8.5寸）、28～29㎝（9.5寸）程度に分かれるようであり、スギも一定量ある。

４．まとめにかえて

古代～中世の木製食器については川畑氏、漆器に関しては四柳氏の多くの論考があり、本稿よりも先行研究を参照されたい。筆者は、現在までの集成を行い、樹種については写真などで比定を試みた。その結果、スギは大盤が無いことや公的に下位の遺跡に多い傾向が伺えた。古代の挽物は、但馬ではヒノキ、丹波ではケヤキ、摂津・山城ではヒノキ、近江ではスギが多く利用され、国毎に樹種と形態も異なる（藤田・阿刀2012）。奈良では、白木はヒノキ、漆器はケヤキが主体（木沢2012）である。北陸地方はスギ文化圏（鈴木・能代1990）であり、石川県の古代では剝物・挽物全体ではケ

ヤキ74%スギ8%トチノキ5%（久田2012）であり、今回古代能登の挽物はケヤキ系65.6%・スギ系31.4%という結果が得られた。

本稿をまとめるにあたり、多くの方々から協力を得たが全てを生かしてはいないのは筆者に責任がある。敬称省略。伊藤伸一、小椋裕樹、川畑　誠、木島　勉、清水　香、高田秀樹、高橋　敦、中野知幸、中山由美、牧山直樹、三浦純夫、安中哲徳、山内花緒、山川史子、四柳嘉章、和田龍介、渡邉朋和。

参考文献

岩瀬由美　2004『吉田C遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

大西　顕ほか　2008『小島西遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

岡田雅人ほか　1990「小池川原地区遺跡」七尾市教育委員会

小椋　繁夫ほか　2006『重要有形文化財　糸魚川木地屋の民具－木地製作用具と製品コレクション』木地屋会

上野　敬ほか　1995『二口かみあれた遺跡』志雄町教育委員会

柏野義夫　1977『石川県の自然環境』石川県

川畑　誠　1994「石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書」『北陸古代土器研究第4号』北陸古代土器『研究会

川畑　誠　1996『北陸地方の木製食器の概要』『古代の木製食器』埋蔵文化財研究会

川畑　誠ほか　2005『四柳白山下遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

川畑　誠ほか　2017『福井ナカミチ遺跡』石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター

川畑　誠ほか　2019『四柳白山下遺跡Ⅵ』石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター

木沢直子、藤田淳・阿刀弘史、久田正弘　2012『木の考古学』海青社

小島芳孝ほか　2003『三引遺跡Ⅱ（上層編2）』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

澤辺利明ほか　2011『杉野屋遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

鈴木光男・能代修一　1990「江跨遺跡出土木製品の樹種について『江跨遺跡』三方町教育委員会

砂上正夫・四柳嘉章　1997『釜屋谷B遺跡』輪島市教育委員会

高田秀樹ほか　1986『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

滝川重徳ほか　2001『三引遺跡Ⅰ（上層編1）』(財) 石川県埋蔵文化財センター

土屋宣雄ほか　1997『寺家遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

土肥富士夫ほか　1986『能登国分寺跡―第四次』七尾市教育委員会

土肥富士夫ほか　1989『能登国分寺跡―第五・六・七次』七尾市教育委員会

中島俊一　1997『下笠師遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター

林　大智ほか　2015『四柳ミッコ遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

久田正弘　2017「漆器の年輪について」『石川県埋蔵文化財情報第37号』(公財) 石川県埋蔵文化財センター

牧山直樹ほか　2010『寺家遺跡　総括編』　羽咋市教育委員会

三浦純夫　1991『杉森テラアト遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

三浦純夫　2017「能登邑知潟周辺の古代交通路」『地域社会の文化と史料』同成社

宮川勝次　2005『南方遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

谷内硯央　1982『釜屋・新保・猫ノ目遺跡』羽咋市教育委員会

四柳嘉章　1991　「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌第34号』石川考古学研究会

四柳嘉章ほか　2011『漆・悠久の系譜』輪島漆芸美術館

四柳嘉章　2018「中世漆器の技術転換と社会の動向」『中世の技術と職人に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館

和田龍介ほか　2018『加茂遺跡・加茂窯跡群』石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター

石川県埋蔵文化財情報
第41号

発行日　2019（令和元）年7月31日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731
URL　http://www.ishikawa-maibun.jp
E-mail address　daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　㈱ハクイ印刷

©（公財）石川県埋蔵文化財センター